


ナチス教員連盟について

—— 組織ならびに教育活動 ——

小 峰 総 一 郎

<p style="text-align: center;">目 次</p> <p>はじめに</p> <p>1. ナチス教員連盟概要</p> <p> (1) 前史と設立 (2) 1933-1938全教員諸団体の一元化</p> <p> (3) 影響力喪失と解体</p> <p>2. 教員諸団体の一元化, 組織確立</p> <p> (1) 教員団体の一元化</p> <p> (2) 組織確立 ①連盟機構 ②ナチ党との関係</p> <p>3. ラガー教育と「ナチス教員連盟」</p> <p> (1) 中等学校生徒の「民族政治科実習」</p> <p> (2) 「教員ラガー」とナチス教員連盟 ①「ナチス革命」当初 ②「オーバーホール」 ③教員ラガー実現 ④確執終了 [シェム死後] ⑤更なる教練ラガー</p> <p> (3) 教員の継続教育とナチス教員連盟</p> <p>ま と め</p> <p>文 献</p>	 <p>「ナチス教員連盟」設立者・初代議長 ハンス・シェム (Hans Schemm, 1891-1935) (© AKG/PPS)</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

はじめに

「ナチス教員連盟」(Nationalsozialistischer Lehrerbund: NSLB) とは、1929年に設立され、1943年に実質解体したナチス教員団体。連盟はナチス第三帝国で急激に拡大したが、ナチ党諸機関並びに官僚組織、ヒトラー・ユーゲント等との確執のために教育政策に決定的な影響力を獲得すること

はできなかった。本部パイロイト。そこは連盟設立者ハンス・シェム並びに後継者ヴェヒトラーが
ガウ長官として勤務したところである……¹。

これは、ナチス教育の研究者フリッツ・シェッファーが、『バイエルン歴史事典』に執筆した「ナチス教員連盟」の冒頭部分である（大要）。私はこの間ナチス教育を調べる中で、授業の内外で強力に、ときに退職脅迫をふくむ強引な人事介入を行ってナチス教育の貫徹、また「ナチス教育学」の確立に突き進む「連盟」の姿に接した²。この、ナチス第三帝国の時代に教育・学校場面で暴虐のかぎりを尽くしたかに見える「ナチス教員連盟」であるが、メンバーを見ると、設立者ハンス・シェム (Hans Schemm, 1891-1935)³をはじめとしてここに集った教員の多くは非教養層「小市民」の出である⁴。彼らはワイマール共和国の「混乱」、連合国のドイツ「蹂躪」をナチス運動によって克服し、ヨーロッパに強大な大ドイツ帝国を築こうとした。彼らの多くは第一次世界大戦に出征して敗北、革命後のワイマール共和国でヒトラー運動に参加する。ナチ党に加わり、ワイマール共和国否定、共和制の「推進者」たるユダヤ人政治家と資本主義の「走狗」ユダヤ人資本家を標的として反ユダヤ主義を奉じ、純粋ドイツ人（＝アーリア民族）による民族共同体の建設＝ドイツ「救済」に向かって突進したのだった。

教育・学校に関して連盟は、ヒトラーが『わが闘争』（原典、第一巻、1925；第二巻、1927）で

1 Vgl. Fritz Schäffer: Nationalsozialistischer Lehrerbund (NSLB), 1929-1943. In: [https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Nationalsozialistischer_Lehrerbund_\(NSLB\),_1929-1943](https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Nationalsozialistischer_Lehrerbund_(NSLB),_1929-1943) 最終閲覧：2019/10/15

2 小峰 総一郎『ナチスの教育——ライン地方のあるギムナジウム——』学文社、2019、参照。

3 私は同書でシェムを次のように紹介した。

ハンス・シェム (Hans Schemm, 1891-1935, 享年45) ——ナチス教員連盟設立・代表；バイエルン文部大臣。パイロイト生まれ、靴屋の二男。師範学校卒・教員。妻は4歳年上。結婚は恐らく経済的な理由。化学の教育に精励。顕微鏡駆使。大戦には病気のため補給所勤務、やがて退役。フライコール(ドイツ義勇軍)参加。1922ナチ党入党。1928バイエルン邦議会議員、1930ドイツ国会議員。東部上フランケンに強固なナチ党組織を建設する。地区指導者。1928「ナチス教員連盟 (NSLB)」を設立し (Hof市にて) 代表。1932加盟者6,000人。1933-35ドイツ教育会館 (Haus der Dt. Erziehung) 設立＝全ドイツの「ナチス教員連盟 (NSLB)」指導のため (パイロイト市)。「積極キリスト教」を唱えてフランケンの福音派司教を獲得。『ナチス教員新聞』刊行。ナチ政権獲得後、コーブルクからバッサウに至るまでの新聞を掌握。1933.1.13ヒトラー、シェムをバイエルン東ガウ長官に任命。1933.4.13バイエルン文部大臣。1934ナチス大学委員会に参与。大学・中等学校は静観、他方国民学校には関心大きくこれに関与。教則大綱を策定しイデオロギー教化を推進。教員養成大学3校設立 (ミュンヘン、ヴェルツブルク、パイロイト)。1935.3.5飛行機事故死。以上ドイツ人名事典 <http://www.deutsche-biographie.de/sfz111520.html> (最終閲覧：2015/09/15) https://de.wikipedia.org/wiki/Hans_Schemm (最終閲覧：2015/09/15) [小峰 総一郎『ナチスの教育——ライン地方のあるギムナジウム——』学文社、2019、p.91。]

4 のちに中等学校教師や大学教授といった教養エリートも含むことになるが、設立当初の会員は殆どが国民学校 (初等学校) のナチ党員教師であった。なお、池内紀は生前最後の著書において、ヒトラーとナチス運動を支持したのが「小市民」であったことを克明に描いている。池内 紀『ヒトラーの時代——ドイツ国民はなぜ独裁者に熱狂したのか——』中公新書、2019、参照。

述べたごとく、それまでのエリート中心の学校、外国語外国文化偏重・「教養」主義の教育に代わり、大衆のためのドイツ語・ドイツ文化の教育、「ドイツ的人間」、「血と土」に根ざす〈勤勞〉人格の育成を目標とした。そのために、学校を超える「社会による教育」（その頂点に「軍隊」がある）を築こうとするのが、それまでの教育と大きく異なる点である⁵。「ナチスの教育」とは、このような「政治」と一体となった教育、「キャンプと隊列」のラガー（Lager）教育、ナチス第三帝国を担う「国家社会主義」人格の教育であり、「ナチス教員連盟」はこれの前衛となって突き進んだのである

このようにナチ時代に「ナチス教員連盟」の存在はまことに大きいのであるのだが、連盟についての本格研究は、ドイツにおいても1981年まで皆無であったという。ドイツでの「ナチス教員連盟」の本格研究は1981年のファイテンの研究を嚆矢とする。

Willi Feiten:

Der Nationalsozialistische Lehrerbund: Entwicklung und Organisation. Ein Beitrag zum Aufbau und zur Organisationsstruktur des nationalsozialistischen Herrschaftssystems,

Weinheim: Beltz, 1981. (Studien und Dokumentationen zur deutschen Bildungsgeschichte 19)

同書の編者クリストフ・フェール／ヴォルフガング・ミッターは「今まで多くのナチス教育研究がある中で、ナチス教員連盟の研究が皆無であったことは驚くべきことである。ファイテンは初めて、広範な資料に基づきナチス教員連盟の設立と発展そして1943年の停止に至るまでを描き出したのである」とその研究の意義を高く評価している⁶。ファイテンの研究は、連盟の成立と発展を中心に、ナチ党との関係、組織と事業、およびナチス世界観研修（教練）活動等を解明した

5 アドルフ・ヒトラー（Adolf Hitler: 1889-1945）は、ランツベルク要塞拘置所で執筆した著書『わが闘争』（Hitler, Adolf: Mein Kampf, Bd. I, 1925; Bd. II, 1927.）において国家社会主義運動における教育を次のように定式化した。（以下の引用はアドルフ・ヒトラー、平野一郎／積積茂訳『わが闘争』下、角川文庫、1973、による）

「民族主義国家の教育原則 ……民族主義国家は、……全教育活動をまず第一に、単なる知識の注入におかず、真に健康な身体の養育向上におくのである。そのときこそ第二に、さらに精神的能力の育成がやってくる。だがここでも、その先端には人格の発展、とりわけよるこんで責任感をもつように教育することとむすびついている意志力と決断力の促進があり、そして最後に初めて学問的訓練がくるのだ」。(p.61)

「スポーツの価値 学校そのものは、民族主義国家においては、身体的鍛錬のためにきわめて多くの時間をさかねばならない。……」(p.63)

「最後、最高の学校としての軍隊 民族主義国家においては、このように軍隊はもはや各人に進めや、止まれ、を伝えるのではなく、祖國的教育の最後、最高の学校とみなされる」。(p.68-69)

6 Feiten, S. 1.

浩瀚なものである（全350ページ）。その構成を大項目に限って記すと次のようである。

序 論

第一部 ワイマール共和国危機とナチズム台頭背景下のワイマール共和国教育政策

- I. ワイマール共和国末期の教育政策問題
- II. 教員たちの政治的自覚状況

第二部 シェム指導下ナチス教員連盟の創設と第三帝国全教員単一職業組織への発展

- I. ナチス教員連盟の創設
- II. ナチス権力掌握までの連盟の拡大
- III. 強化された連盟活動
- IV. 画一化過程
- V. 連盟自治強化への連盟指導部の諸活動

第三部 ナチス政権移行後の連盟の組織構造

- I. ライヒ・専門レベルにおける新組織原理としてのライヒ専門部
- II. ライヒ専門部
- III. ナチス教員連盟の新機構担当としての局

第四部 ナチ党組織内における連盟の法的性格ならびに法人格

- I. ナチ党の法的性格
- II. ナチ党内のナチス教連の法的性格

第五部 ヴェヒトラー指導移行後の連盟の諸変化

- I. 指導者交代後の人事再編
- II. 機構改編

第六部 1943年活動停止までの連盟の重点活動領域

- I. 学校分野での重点活動領域
- II. 連盟の「ナチス」世界観教練活動
- III. 連盟の「郷土戦線」(Heimatfront)
- IV. ナチス教員連盟の終息局面

結論考察

そこで小論では、わが国でこれまであまり知られていなかったナチス教員連盟の形姿を、ファ

- 7 日本において、これまでナチス教員連盟については通史の中で触れられる程度であった。梅根 悟監修〈世界教育史大系〉(講談社)に収められた以下のものが代表的である。(藤沢法暎「第5章 戦争と教員 第1節 ドイツ」『ドイツ教育史2』〈世界教育史大系12〉講談社, 1977; 林量淑「第7章 総力戦教育の成立と展開——ナチズムの時代—— 第1節 教育「均制化」政策の展開過程」『教員史』〈世界教育史大系30〉講談社, 1977)。それに対し、近年江頭 智宏は連盟の「新教育認識」を問題にした。(江頭 智宏「ナチス教員連盟における新教育認識に関する研究」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第63巻, 2012/3。)しかしわが国で、ナチス教員連盟それ自体を研究したものは管見のかぎり無いようである。

なお Nationalsozialistischer Lehrerbund (NSLB) の訳語についてであるが、これは「民族社会主義教員同盟」(藤沢法暎)、「ナチス教員連盟」(林, 江頭)などとなっている。„Bund“ の訳語は一般的には「同盟」であるが、日本語の「同盟」は比較的少数の同志結合というニュアンスが強い。これに対し、30万名(概数)の会員を要する同団体は、「同盟」より大きい規模を表す「連盟」の方が実情に近いと思われる。

イテンの研究を中心として、特にナチス「ラガー教育」に注目して紹介してみたいと思う⁷。(小論は「ナチス教員連盟」を「連盟」, 「ナチス教連」などと略称することがある。)

1. ナチス教員連盟概要

まずフリッツ・シェッフアーにより「ナチス教員連盟」の概要を押さえておきたい⁸。

(1) 前史と設立 (ナチス教員連盟 Nationalsozialistischer Lehrerbund (NSLB), 1929-1943)

ナチス教連の開始——1926. 7. 3-4 ワイマールでのナチ党大会に遡る。

正式発足——1929. 4. 21 ホーフ[バイロイト近郊]で設立大会。これは予め、上フランケンの
停職教師・バイエルン州議ハンス・シェム (Hans Schemm: 1891-1935, 1928年よ
りバイロイト・ガウ長官) 招集で、ナチ教員が会合を重ねたのちのことだった。

1929. 8——ナチ党ニュルンベルク大会で正式承認。当時連盟員はわずか200名。これはシェ
ムの指導のもと、同連盟は他の教員諸団体とは異なって、自らを教員利益団体と
見做すのではなく、アドルフ・ヒトラー (Adolf Hitlers: 1889-1945) の権力掌握の
ための闘争組織と規定していたからである。

年	1929. 8
数	200

これに対応し、ナチス教連の政策は限定的であり、ごくわずかの政策、すなわ
ち教員の学術化、宗派共同学校の導入、並びに大部分の自由主義的・マルクス主
義的・民主主義的志向の教員団体との仮借なき闘争、に制限されていた。

・攻 勢——1932半ばから。それまでの取るに足らぬナチス教連は攻勢に転ず。これにより、
信望あるフランクフルト大学教授クリーク (Ernst Kriek: 1882-1947) は同連盟
を公式に認知、これによる全教員集団の統一という夢を描く。

会員数飛躍増大

年	1932. 4	1932. 9	1933. 3
数	4,000	9,000	12,000

る(「連盟」の原語は „Verband“ であるが)。また „nationalsozialistisch“ の訳語として「民族社会主義の」、
「国家社会主義の」も誤りではないが、近年では「国家社会主義党(ナチ党)の」、「ナチズムの」、「ナチ
スの」のように、ヒトラーの「ナチ党」(=「国家社会主義ドイツ労働者党 Nationalsozialistische Deutsche
Arbeiter Partei <NSDAP>」)を表す簡明な表現が一般的となっている。そこで小論において筆者(小峰)
は、Nationalsozialistischer Lehrerbund (NSLB)を「ナチス教員連盟」と表現することとする。

8 以下は、Schäffer: a. a. O., による。最終閲覧: 2019/10/15, 小見出しは小峰。

(2) 1933-1938全教員諸団体の一元化

- ・ナチスの権力掌握 (1933. 1. 30) ——ナチス教連の所期の目標達成。

↓

- ・シエム——この闘争組織を、全教育者 (Erzieher) の統一戦線形成を課題に設定。それは次の2つを通して。

- ①個々会員の志願による
- ②伝統ある教員諸団体を傘下化

↓

脅しと権力発動で2つを達成：1933年末——会員250,000名到達

年	1933年末
数	250,000

- ・大部分の旧教員諸団体——解散。例外はバイエルン教員組合 (Der Bayerische Lehrerverein, BLV) とドイツ中等教員連盟 (Der Deutsche Philologenverband) : 1937/38まで抵抗。
- ・1933までのナチス教連——ナチ党員教員を組織するも、教員メンバーの20%にしか過ぎず。

↓

党とのコンタクトが欠ける恐れあり

↓

- ・シエム (全国指導者=1933. 3よりバイエルン文相兼任) ——党とのより密接な関係構築めざし

●1934. 9 ナチ党全国指導部は「教育者主庁 (Hauptamt für Erzieher)」設立。

||

- ・ナチス教連全国指導者シエムが、これを一人二役 (Personalunion) で指導。
- ・多くの解散した教員組合=それほど大きくない教員組合のナチス教連統合を果たすため → バイロイトの全国指導部再編, 大拡大行う

↓

- ・全国指導部とガウ指導部との権限混乱生ずる ← 解散した教員組合は、通常、地域的に限定。また、それは今までの組織編成を継承していた。

(3) 影響力喪失と解体

●組織過重——ナチス教連の全期間、連盟は、活動内容以上に組織問題の過重から解放されることがなかった。

↓

連盟は、自分とその複雑な構造とにかかり切り→そのため、教育政策分野で決定的な影響力を

獲得し得なかった。

- 本状況——シエム [飛行機] 事故死 (1935)。後任ヴェヒトラー (Fritz Wächtler, 1891-1945, ナチス教連全国指導者・教育者局長・バイエルン東ガウ長。チューリンゲン文相) の下でも、これは変わらず。
- 第二次世界大戦中、連盟危機加速——財政が、その複雑な構造のもと、益々コントロールが利かなくなる。

↓

- ・1943——ナチ党財務局指令で実質解体。連盟はこれに大きな抵抗は行わなかった。

2. 教員諸団体の一元化, 組織確立

(1) 教員団体の一元化

さてこのナチス教連についてシェッファーは、「教育政策に決定的な影響力を獲得することはできなかった」と言う。たしかにナチス教連は、「帝国教育省」の設置 (1934年) であるとか、中等学校短縮 (ギムナジウム等の中等学校を従来の9年から8年に短縮, 1937年) といったような、全ドイツ (ライヒ) 的教育改革を行ったわけではない。しかし、前節で述べたように、ナチス教連は〈学校〉の教育に代わる〈社会〉による教育、「政治」と一体となった教育、ナチス第三帝国を担う「国家社会主義」人格の教育、そして「キャンプと隊列」のラガー (Lager) 教育という、これまでのドイツ教育が経験したことのない〈新しい教育様式〉の担い手だったのである。

当初ナチ党员のみによって構成されていた少数精鋭の連盟であったが、やがて、教員諸団体を悉く解散させて「ナチス教員連盟」に「画一化」(グライヒシャルトゥング Gleichschaltung: 一元化)、1937年には学校現場では教員の97%が「ナチス教員連盟」所属となった⁹。ファイテンは、この学校現場の97%の教員が「ナチス教員連盟」となった翌年(1938年)の加盟教員数を、学校種類別に次のように示している¹⁰。

9 Rolf Eilers: Die nationalsozialistische Schulpolitik : eine Studie zur Funktion der Erziehung im totalitären Staat. (Staat und Politik, Bd. 4), Westdeutscher Verlag, 1963, S. 74.

1937年には学校現場では「97%の教員が」ナチス教員連盟所属となった。原文の「97%の教員」は、97% der Lehrerschaft」とあり、これは大学教員も含んでの数であろう(次項 Feiten にもとづく表1参照)。

アイラーズの「97%」という記述の出所は「WuR...1937, S. 209.」とある (Ebenda)。この『WuR』とは、ナチス教員連盟の事務機構帝国オフィス (Reichsgeschäftsstelle) の一つ「経済・法務局」が発行する情報紙『経済と法: ニュースレター』Die Abteilung Wirtschaft und Recht のことである。Reichsgeschäftsstelle der Abteilung Wirtschaft und Recht im NSLB (Hrsg.): Wirtschaft und Recht, Nachrichtenblatt, Berlin 1-12 (1934-1945)。

ナチス教員連盟の事務機構、帝国オフィス (Reichsgeschäftsstelle) は次の6局から成っていた。財務・統括局、組織局、経済・法務局、教育・教授局、新聞・プロパガンダ局、著作物局 (Feiten, S. 96-132, 次節参照)。

10 Feiten, S. 313-314, Anm. 162.

表1. 「ナチス教員連盟」構成員内訳 (1938. 11)

校種	人数
大学	1,840
中等学校	41,210
中間学校	9,790
国民学校	208,650
職業・専門学校	5,860
特殊学校	23,445
社会教育職	8,650
[計	299,445]

大学教員1,840名をはじめ、中等学校・中間学校教員約5万名、そして最大の数をなすのが国民学校教員の20万名。その他の教員を加え、約30万名の教員が「ナチス教員連盟」に加わっていたのである。なお、これとは別に大学のナチ化を目的として大学教員の団体「ナチス大学講師同盟」(Nationalsozialistischer Deutscher Dozentenbund, 1935. 7, ナチ党副総統ルドルフ・ヘス (Rudolf Walter Richard Heß, 1894-1987) の呼びかけで設立) が組織され、1938年には大学教員の4分の1がこれに加わっていたという¹¹。

この結果、学校現場では「連盟」の指示のもと、ギュンター (Günther, Hans Friedrich Karl: 1891-1968) の「遺伝学」やブルハルト (Prof. Dr. Albrecht Burchard, 1888-1939) の「人種学」, 「地政学」, フォルカース (Johann Ulrich Folkers, 1887-1960: ロストック教員養成大学歴史学教授) の「生存圏」論といった「ナチス教育学」が、「ナチス教科書」を通して画一教育され得たのだと言える¹²。これに抵抗した教員は退職を強いられた。それは、池内紀が述べるような、ナチ

11 Nationalsozialistischer Deutscher Dozentenbund https://de.wikipedia.org/wiki/Nationalsozialistischer_Deutscher_Dozentenbund 最終閲覧: 2019/10/25

12 ブルハルト (地理学者, 地理・地政学教育推進。フランクフルト (オーデル) 教員養成大学学長), フォルカース (民俗学, 歴史学。ロストック教員大学教授。ナチス人種学の理論家) の横顔を述べると次のごとくである (大要)。

①アルブレヒト・ブルハルト (Prof. Dr. Albrecht Burchard, 1888-1939)

ナチス教員連盟の「地理学ライヒ専門委員」(Reichssachbearbeiter für Erdkunde, 1934)。小学校教師の息子。1902-1908師範学校。国民学校教員 (1908-1914)。1913以来イエナ大学に学ぶ (数学, 物理学, 地理学)。1914-1918第一次世界大戦参戦。1921イエナ大学学位取得。1922-1929イエナ大学地理学助手。1923教授資格論文 (地理学 Geographie)。1924-1928鉄兜団員。1927イエナ大学非官吏員外教授。1929-1934ドルトムント教育アカデミー教授 (地理科 Erdkunde)。同時にミュンスター大学非官吏員外教授。1932ナチ党並びにナチス教員連盟加盟。1933以来 SA 団員。1934ナチス教員連盟の「地理科ライヒ専門委員」(Reichssachbearbeiter für Erdkunde)。1934-1938フランクフルト (オーデル) 教員養成大学学長。1935以来クールマルク・ガウ・大学教員同盟会長, 1936以来ベルリン大学名誉教授, 1938-39イエナ大学正教授。1939. 12. 28 腎臓手術後死亡。(Grüttner, M.: Biographisches Lexikon zur nationalsozialistischen Wissenschaftspolitik, Heidelberg: Synchron, 2004, S. 32-33.)

ス「国民共同体」という相互監視システムが確立したことを物語っていた¹³。

このようなナチス教員連盟の学校現場支配のなか、ドイツでは従来、邦（州）の権限として行われてきた文化・教育・宗教の自治（「文化連邦主義」ないし「文化高権」）が、帝国教育省創設（1934）とともに、党（ナチ党）＝国家による一元支配となったのである。ナチス教育研究の泰斗ハラルド・ショルツ（Scholtz, Harald, Prof. Dr.: 1930-2007, 元ベルリン自由大学教授。故人）は、ナチスの教育支配を ①重要政治決定 ②新規機関・重点 ③学校機構、教育課程 ④教員団体、教員養成 ⑤青少年政策、に分節化して立体的に描き出している¹⁴。これら施策の実行に当たっては、教員団体をグライヒシャルトゥング（一元化、画一化）して学校をナチ化した「ナチス教員連盟」によるところが大きかったのだ。

②ヨハン・ウルリヒ・フォルカース（Johann Ulrich Folkers, 1887-1960）

ロストック教員養成大学歴史学教授、生存圏（Lebensraum）論。ナチス人種学の理論家。メクレンブルク、ヴァンガーラントの地主の息子。キール大学卒、学位論文は民話の研究。フーズムのギムナジウム教師。1913-1928ロストックで上級教員。大戦参加。1928師範学校教授、歴史。メクレンブルク邦の成立ののち、師範学校は初等教師養成の教員養成大学となる。低地ドイツ民族学研究に携わり、戦後も北ドイツの農家建築に関する書を著す。1933. 5. 1ナチ党入党 1934からナチス教員連盟空間研究専門委員。有名な教科書『ドイツ民族の歴史』編集。これは1935から国民学校において使用される。1939大学で地政学講座拡大、地政学教授。ライヒ地政学研究委員会委員長としてライヒレベルでナチスの教員養成に係る。戦後は故郷（メクレンブルク＝東独）の農家屋敷に戻る。退職後東フリースランド海浜屋敷の民俗研究等に携わり、これらを出版、のちに社会政策的テーマに携わる。晩年は北ドイツ農家屋敷建築の社会経済研究へ。ドイツ民主共和国の専門家バウムガルテンは教え子。バウムガルテンによれば、「フォルカースは疑いなくメクレンブルク農家屋敷研究の最重要の人物」https://de.wikipedia.org/wiki/Johann_Ulrich_Folkers 最終閲覧：2019/10/23

フォルカースは「人種と空間」（「血と土」の洗練用語）で歴史を叙する。彼は歴史の歩みを、ポーランド人のユダヤ人的墮落とインド・ゲルマン空間に広がる北方人種の指導役割の間で整序した。歴史はすなわち人種の歴史だ；偉大な国家的文化的卓越はこの「北方人の血のうねり」のお陰なのである、と。Harten, Hans-Christian/ Neirich, Uwe/ Schwerendt, Matthias: Rassenhygiene als Erziehungs-ideologie des Dritten Reichs: Bio-bibliographisches Handbuch. Berlin: Akademie Verlag, 2006, S. 201.

- 13 「風見鶏、日和見主義者、時流便乗派……そういった小市民的特性を最大限に発揮させて、ナチス指導部は理想的な『国民共同体』を作り上げた。……誰もが隣人を知っており、共同の意思の下に、手をたずさえて国に奉仕している。それは言い換えれば、日常の隅々まで監視の目を光らせていること、隣人が互いを見張っており、同じ屋根の下の親しい同士が見張っている。その中で権力にすり寄るものが力を持ち、ひそかな情報を手に入れる」と。池内、前掲書、p.253。
- 14 Scholtz, Harald: Erziehung und Unterricht unterm Hakenkreuz. (Kleine Vandenhoeck-Reihe, 1512), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985, S. 50-55.

表2. ナチス教育政策と教育・学校 (1933-1945) (ショルツによる。塗りつぶし, 太字は小峰)

分野 年	①重要政治決定	②新規機関・重点	③学校機構, 教育課程	④教員団体, 教員養成	⑤青少年政策
1933	1. 30ナチ党政権掌握 4. 官吏任用法 7. 病気後継者予防法 11. 歓喜力行団をドイツ労働戦線内に設立	4. 国家政策教育舎 (NAPOLA: ナポラ) をプロイセンに設立 5. 内相フリック, ドイツ学校の闘争目標	2. 集合学校を解体, 人生科授業停止 8. [プロイセン文部] 省令, 学校とヒトラー・ユーゲンとの関係について 9. 最上級クラスにおける人種・遺伝学の顧慮 10. ルスト, プロイセン省令, 民族政治科実習導入 12. 学校規定の根本思想	3. 教員諸団体の一元化開始 5. 地域密着教員養成大学	4. ドイツ青年連盟全国委員会掌握 7. ヒトラー・ユーゲント編成 12. ヒトラー・ユーゲントに職業身分連盟導入 10. 4 「民族政治科実習」 (Nationalpolitische Lehrgänge) 制定
1934	2. ナチス騎士団城 (Ordensburg) 建設開始 5. 1帝国教育省を設置 (職業教育も下屬)	3. 「農村年」 (Landjahr) (プロイセン) 6. 7 「国家青年日」 (Staatsjugendtag [土曜授業ヒトラー・ユーゲント活動に充当]) 導入 (1936年まで) 5.-10. 農村継続教育制度を規定 9. アルタマーネン (Artamanen: 農耕者) 移管によるヒトラー・ユーゲントの農村奉仕設置	10. 父母評議会 (Elternbeiräte) を学校共同体 (Schulgemeinde) に取換	6. 中等教員州試験局 (Philologisches Landes-Prüfungsamt) 設置 8. 教員再教育ラガー (Schulungslager für Lehrer)	4. 帝国職業コンクールをヒトラー・ユーゲントとドイツ労働戦線により組織 6. 職業指導, 教職仲介にヒトラー・ユーゲント影響力確保
1935	3. 国防法 (Wehrgesetz) 9. 帝国民民法 Reichsbürgergesetz (ユダヤ人は「国籍者」 Staatsangehörige) 9. ドイツ福音教会保全法	7. 学校ミサ Schulgottesdienst 参加今後自由化 9. ユダヤ人学校制度設立	6. ライヒ教育省令: 「中等学校での生徒選抜」 (1942年まで有効) 7. 国民学校用帝国教科書を策定	9. 国民学校教員試験規則	5. 少年裁判訴訟に HJ 参入 6. 帝国労働奉仕法 Reichsarbeitsdienstgesetz 7. 農村青年を HJ に組み入れ 8. 職場青年代表制 Betriebsjugendwalter 導入 9. 帝国青少年指導部 Reichsjugendführung に文化局 Kulturamt 設置
1936	4. HJ の年齢別組織化開始 8. ベルリンオリンピック 10. 4ヵ年計画開始	3. シュタルンベルク湖 (バイエルン) のナチス・ドイツ高等学校, ナチス教員連盟に下屬 12. [3] 学校の「民族政治科実習」 (Nationalpolitische Lehrgänge) 「禁止」 (Verbot) 12. [4] 「国家青年日」 (Staatsjugendtag) 廃止	2. 中等学校の男女別学 (1939年まで) 4. ギムナジウムを削減, 英語を第一外国語とする 11. 中等学校を短縮, O I 級廃止 [=8年制], (12学年)	5. ナチス教員連盟による教員講習	7. ヒトラー・ユーゲントと帝国スポーツ指導者との協定 12. 1 ヒトラー・ユーゲント法
1937	3. 国家業務被備者, 総統への忠誠宣言 5. 官吏組合法	1. アドルフ・ヒトラー校, ヒトラー・ユーゲント (HJ) とドイツ労働戦線 (DAF) により設立 3. SS 総統, プロイセンのナポラ (NAPOLA 民族政治教育舎) 監督となる。 3. 中等学校制度統一 (1940年まで校種は分化) 10. 職業教育制度規則	3. 男子高校, 女子高校, ギムナジウム, 上槽学校 4. 基礎学校教則大綱 (1940.12まで) 7. 宗教授業は「聖職者でなく」教師だけにより存続可 9. 男子校の体練 (Leibeserziehung)	6. 高校教員第二次試験全国規則。教員養成大学で高校教員養成開始 10. 国民学校教員試験規則 11. なお存続していた教員組合「連盟」解体	1. 新少年刑執行 2. ヒトラー・ユーゲントに競争スポーツを移管

1938	3. バイエルン学校監督法 7. 帝国就学義務法 11. ユダヤ人生徒、公学校から排除	1. 中等学校教育教授規定（宗教教授教則大綱なし） 7. 中級成熟証廃止 8. 特別成熟試験、英才試験確立	4. 「プロイセン養護学校」命令	3. 教員新聞の中央集権化 4. ナチス教員連盟（NSLB）、宗派学校対抗アジテーション 10. 教員養成大学における国民学校教職者履修規則	1. 19 ドイツ少女団（BDM）下部機構「信念と美」 4. 女子アビトゥーア生徒の奉仕義務年 4. ヒトラー・ユーゲント健康証、適格性検査 12. SS 戦時農民養成対応協定
1939	2. ドイツ官吏養成経歴規則 7. 教員 = 帝国官吏化 10. ヒトラー、ポーランド人知識人絶滅を希望	8. ドイツ諸邦アビトゥーア試験同等化 12. 国民学校教育教授規定 12. 中間学校教育教授規定（1941年まで有効）	2. 都市家政教育規則 4. 帝国統一読本協定	2. 教員養成大学学修用上構学修課程コース（プロイセンの教員不足 [のため]）	1. ヒトラー・ユーゲント寮調達促進法 3. 青少年奉仕命令: 義務ヒトラー・ユーゲント制 9. 不就業婦人の帝国労働奉仕（RAD）召集
1940	6. 世界観授業、戦時不要化 10. ボイムラー、教科書を党により検閲 12. ヒトラー演説、ナチス教育政策言及	10. ヒトラー、ナポラ拡大を希望 11. オーストリア基幹学校、教員養成所を引き受け、帝国制度化	3. 中等学校上級の宗教授業を廃止: 「戦時中等学校授業編成」 8. 農業職・農業専門学校教則大綱: 学校における古材、草木採集開始	11. 国民学校教員帝国統一給与制度	3. 6-18歳の全青少年健康保護 9. 拡大学童疎開 10. ヒトラー職務懲罰規定
1941	5. 就学義務法変更（基幹学校、選択必修校となる）	4. 基幹学校導入: SS 指揮下のドイツ家庭学校（Deutsche Heimschule） 12. 私立寄宿制学校、SS 指揮となる	1. アビトゥーア試験コメント制導入 5. 宗教科、成績証明書記載廃止 9. アンティカ字体、標準字体となる; 学年秋開始制 9. 女子の学校体育教則大綱	2. 教員養成大学に代わって教員養成所（Lehrerbildungsanstalt）を設置 8. 教員の休暇を3週間に短縮	1. 職業者選抜ラガー（Ausleselager）開始 1. 学校とヒトラー・ユーゲント間要求権協定——ヒトラー・ユーゲントは国防教育、スポーツ選抜を引き受ける 9. 1924-28年生れ [13-17歳]、ヒトラー・ユーゲント活動に召集 10. 青少年保護ラガー（Jugendschutzlager）内の対抗青年グループ（「青少年福祉」ライヒ作業チーム設立）
1942	3. 教員新給与規則、国防力鍛錬キャンプ行事（3週間） 6. ユダヤ人児童就学締め出し 7. 中等学校から「雑種」（Mischlinge）締め出し	4. ランゲマルク特進コースの拡大: HJ（ヒトラー・ユーゲント）と DAF（ドイツ労働戦線）の英才促進活動 6. 基幹学校は旧帝国領にこれ以上拡大せず 9. オランダに「帝国学制」 10. ナチ党アドルフ・ヒトラー校を国家学校化	2. 党官房、生物教育を批判 2. AHS（アドルフ・ヒトラー校）卒業をアビトゥーアと同格化 2. 特殊学校教則大綱 3. 基幹学校教則大綱	3. LBA（教員養成所）授業料を無料 4. 助教養成 7. 徴兵検査キャンプによる教員養成所選抜 8. 産業教員養成規則	4. 戦時収獲補助奉仕 9. 「ヨーロッパ青年連盟」（Europäischer Jugendverband: ファシズム青年インターナショナル）、ウィーンで設立
1943	2. NPEA（国家教育舎 = ナポラ）授業料無料 9. 生徒の防空補助者化（9学年終了後）	学業代替としての KLV（学童疎開）: 国防補助者への学校教育	11. 中等学校カリキュラムを7級に短縮 [= 7年制]（11学年）	3. ナチス教員連盟「停止」: 教員新聞制限 11. 国民学校教員用新試験規則	HJ（ヒトラー・ユーゲント）戦時出動年
1944	11. 第8学年労働奉仕 12. ナチ寄宿制学校出身者のみによる士官供給			10. 国民学校教職者用軍隊入隊訓練規則 10. 国民学校教員給与の国（Staat）移管	
1945	1. 中等学校生4年修了生・5年修了生応召				

(2) 組織確立

当初ナチ党員教員のみで構成されていた連盟は、「教員メンバーの20%」にしか過ぎなかった。これでは教員団に対して党の影響力を行使しえない。そこでナチ党と緊密な連携を取るため、議長シエムの指導の下に個人参加ならびに旧・教員団体の解体・傘下化（グライヒシャルトゥング Gleichschaltung）を行って組織を大拡大、こうして「1937年には学校現場では教員の97%がナチス教員連盟所属」となるに至ったのである（このときすでにシエムはこの世を去っていた。1935. 3. 5 飛行機事故死。享年45（1891-1935））。

①連盟機構

だが、初等学校から大学まで30万名を擁する大組織の運営は困難な課題である。そこには校種の違いによる関心や要求の多様性——初等学校から職業・専門学校、研究を主とする大学まで——；来歴の違いによるナチズム、ナチ党への姿勢の濃淡——初等学校教員の教員組合 *Lehrerverein* は、政治志向は社会主義的。対して中等学校・大学教員は元々〈教養主義〉で、いずれもナチスとは距離があった——；さらに宗教、性、地域特性の違い——かつて福音派とカトリック派の教員団体が存在し、都市中心の教員団体に対し農村学校の教員団体も存在。男性教員中心の組合から、やがて女性たちの団体も発足。元々全国組織として発展したものと、地方限定の団体——と、一元化される以前の教員団体は、規模においても志向・要求においても、そしてナチス世界観に対しても実に多様、多質、多層であった¹⁵。

したがってこれらを束ねるため、連盟は度々組織改編を行っている。ファイテンの記述と整理からそれらを一瞥すると次のごとくである¹⁶。

表3. ナチス教員連盟専門部、専門分野（ファイテンによる）

Nr.	専門部 Fachschaft : 従来型。バーデンもプロイセン型の4専門部 (Feiten, S. 78.)	[構成員]
n.01	専門部 1	国民学校学校・中間学校 (教員)
n.02	専門部 2	専門学校・職業学校 (教員)
n.03	専門部 3	中等学校 (教員)
n.04	専門部 4	大学 (Hochschule) (教員)
n.05	専門部 5 (ザクセン)	障害児施設 (Heilpädagogische Anstalten)

Nr.	1933. 6. 15 シエム指令により専門部 Fachschaft 設置 (Feiten, S.78)	[構成員]
n.01	専門部 1 Fachschaft I	大学教員 <i>Lehrer an Hochschulen</i>

15 ベリング, R., 望田 幸男 [ほか] 訳 『歴史の中の教師たち: ドイツ教員社会史』ミネルヴァ書房, 1987, 3-6章, 参照。

16 Vgl. Feiten, S. 78-132; 313-314, Anm. 162.

n.02	専門部 2 Fachschaft II	中等学校教員 Lehrer an Höheren Schulen
n.03	専門部 3 Fachschaft III	中間学校教員 Lehrer an Mittelschulen
n.04	専門部 4 Fachschaft IV	国民学校教員 Lehrer an Volksschulen
n.05	専門部 5 Fachschaft V	特殊学校教員 Lehrer an Sonderschulen
n.06	専門部 6 Fachschaft VI	職業・専門学校教員 Lehrer an Berufs- und Fachschulen
n.07	専門部 7 Fachschaft VII	社会教育職 Sozialpädagogische Berufe

Nr.	1933. 12. 8 ライヒ専門部 Reichsfachschaft シェム指示で1933.6.15指令を改正, 同盟機構を改革 (S. 80-81)	[構成員, 部長]
n.01	ライヒ専門部 1 Reichsfachschaft I	大学教員 Lehrer an Hochschulen のライヒ専門部。部長は文部参事官 Dr. Haupt, Berlin 代理: Dr. Greite, Berlin。NSLB ライヒ指導部ライヒ専門部報告官 Dr. Gall, ミュンヘン
n.02	ライヒ専門部 2 Reichsfachschaft II	中等学校教員 Lehrer an Höheren Schulen 部長: 文部報告官 ベンツェ Dr. Benze, Berlin
n.03	ライヒ専門部 3 Reichsfachschaft III	中間学校教員 Lehrer an Mittelschulen 部長: 校部長 Thielke, Berlin
n.04	ライヒ専門部 4 Reichsfachschaft IV	国民学校教員 Lehrer an Volksschulen 部長: Dr. Bargheer, Berlin
n.05	ライヒ専門部 5 Reichsfachschaft V	特殊学校教員 Lehrer an Sonderschulen 部長: Paul Ruckau, Liegnitz
n.06	ライヒ専門部 6 Reichsfachschaft VI	職業・専門学校教員 Lehrer an Berufs- und Fachschulen 部長: 産業学校官 Gehrt
n.07	ライヒ専門部 7 Reichsfachschaft VII	独立教育者 部長: Otto Bönold, Berlin

Nr.	専門分野 Fachgebiet (1934設置, S. 81)	内容 (責任者)
n.01	専門分野 a)	哲学, 心理学, 教育学 (Dr. リーフアート Riefert, ベルリン)
n.02	専門分野 b)	芸術教育 (ヘルマン・ダーメス Hermann Dames, ベルリン, ワルター・キルヒナー Walter Kirchner, ドレスデン)
n.03	専門分野 c)	体錬分野 körperliche Erzüchtigung (Brendes, Berlin; Dr. Winters, Berlin)
n.04	専門分野 d)	学校田園寮 Schullandheime (Dr. Nicolai, Buchholz/Saar)
n.05	専門分野 e)	速記, タイプライター (Lang, Kulmbach)
n.06	専門分野 f)	出版, 通達 (Sommer, Mehlteuer)
n.07	専門分野 g)	教員養成 (Voigtländer, Dresden)
n.08	専門分野 h)	地理学 Geographie (Dr. Burhard, Dresden)
n.09	専門分野 i)	人種学問題 Rassenfragen (Zimmermann, Karl, Zwickau)
n.10	専門分野 k) [ママ]	青少年図書 Jugendbuch (Rottemund, Bayreuth)
n.11	専門分野 l) [ママ]	研修 Schulung (Wolf, Bayreuth)
n.12	専門分野 m) [ママ]	女子教育全般 die gesamte weibliche Erziehung (Dr. August Reber-Gruber, Fürstentfeldbruck)

そして、これらを運営するため連盟は機構を次のように定め、連盟本部（パイロイト）に「ドイツ教育会館：Haus der deutschen Erziehung」を建設した。

表4. ナチス教員連盟機構

Nr.	連盟機構 局 Abteilung (Feiten, S. 96-132.)
n.01	財務・統括局 Die Abteilung Kasse - Verwaltung
n.02	組織局 Die Abteilung Organisation
n.03	経済・法務局 Die Abteilung Wirtschaft und Recht (WuR)
n.04	教育・教授局 Die Abteilung Erziehung und Unterricht
n.05	新聞・プロパガンダ局 Die Abteilung Presse und Propaganda
n.06	著作物局 Die Abteilung Schrifttum

●ドイツ教育会館 (Haus der deutschen Erziehung: 中央本部)

連盟の中央本部「ドイツ教育会館 (Haus der deutschen Erziehung)」は、1933年9月24日、議長シエムの指揮の下に建設が始まり、1936年完成。同年7月12日、連盟は全国大会をここで開催し完成を祝った(そのときシエムはすでにこの世を去り、ヴェヒトラーが第2代議長となっていた。連盟はシエムの事績を顕彰するため、教育会館前の広場を「ハンス・シエム広場」(Hans-Schemm-Platz)と改称している¹⁷⁾。

なおナチス教員連盟の用語法を見てみると、このドイツ「教育」会館 (Haus der deutschen „Erziehung“) を始め、「教育者」 („Erzieher“), 「民族の教育者」 („Volkserzieher“) というように、それまでの「教育」を表す一般的用語 Bildung (〈学校〉教育), 〈教養〉に代わって、意識的に〈教育〉 (Erziehung) を使用していることに気付かされる。これは、ヒトラーが『わが闘争』で述べたナチス教育理想を、シエムがより詳細に定義づけた用語法と言えるであろう。

1933年1月30日のナチ党政権掌握 (連立政権) の直後、2月22日の連盟大会でシエムは、「誠実、犠牲心、口の堅さ、意志力・決断力、責任の喜び——これの教育によって作られるのが『ドイツ的人間』 (der „Deutsche Menschen“) だ。学問的教育は、その次に初めて来るのだ」と述べている。そして、「授業は死んだ知識の提供にあらずして、上記美点を伝え、これが性格を育てる力となり、若き人間のたましい (Seele) を形作るというように行われる; その源泉は、ドイツの民族性、ドイツの故郷、そして永遠に生き続けるドイツ的人間像なのだ; 体錬に大きな空間を与えて、ひとが神と呼びうるほどの健康で美しい身体を作り上げられよう、あらゆる手段でこれを養護、支援するものである」と¹⁸⁾。

連盟の謂う「教育」 (Erziehung) とは、そのようなナチ的人間の「錬成」を指しているのである。

17 Vgl. Feiten, S. 78-132; 313-314, Anm. 162.

18 Vgl. Feiten, S. 52. (大要)

②ナチ党との関係

それと共に問題となるのがナチ党との関係である。さきの「ドイツの教育者の97%がナチス教員連盟メンバー」という部分のファイテンの指摘は次のようになっている。

「1937年、ナチス教員連盟ライヒ指導部は、ドイツの教育者の97%がナチス教員連盟メンバーであるという度外れた数字をニュースレターで公表したが、その内ナチ党に所属しているのは僅か32%だけであった。その32%のうち、7名がガウ指導者・副ガウ指導者で、78名が郡指導者、2,668名が地区指導者・支部指導者で——それはつまり、合計2,753名が党の高位指導者だった。さらに、ナチス教員連盟の約62%の人々が、党の指導的地位を占めていたのである」¹⁹。

連盟メンバーの大拡大を行って約30万人の大組織となったナチス教員連盟だったが、党員比率はかつての20%から32%に増大したに留まった。しかし私は、この指摘の後段「ナチス教員連盟の約62%の人々が、党の指導的地位を占めていた」に注目したい。それは、ナチ時代の教育を見ていると、旧体制の中では「指導者」たりえなかった人々が、ナチス体制となり、このナチス運動に連なることによって政治、「学問」の指導的地位を占める事例を再三目にするからである。連盟指導者のシェムやヴェヒトラを始めとして、地政学の指導者ブルハルトらはその典型的事例で、いずれも国民学校教員の経歴からナチス教連指導者、政治家、大学教授（新設教育アカデミー、教員大学の教授）となっている。学校田園寮の「ラガー教育」を称揚した「フライベルク覚書」の起草者、アルトウール・ゲップファート（Arthur Hugo Göpfert, 1902-1986）も、ザクセン・ガウの教育者庁長官を経てライヒ国会議員になるが、家は酒屋業で、国民学校教師だった人物である。のちに「ナチス教育学」の代表者と目されるエルンスト・クリーク（Ernst Kriek, 188-1947）、アルフレート・ボイムラー（Alfred Baeumler, 1887-1968）についても、クリークは左官親方の家に生まれて24年間国民学校教師。ハイデルベルク大学で学位を得て教育アカデミー教授、その後ナチス教員連盟・ナチ党員となって（1932年）フランクフルト大学、ハイデルベルク大学でナチ党支援活動、「ナチス教育学」構築に従事している²⁰。ボイムラーは陶器絵師・保険業の家の子で、上記メンバーとは異なってミュンヘン大学、ベルリン大学、ボン大学で哲学・歴史・教育学を修めた、「ナチス教育学者」の中では数少ないアカデミカーキャリアである。しかし1933-1945の間ベルリン大学正教授（哲学・政治教育学）をつとめたが、1933年のベルリン大学教員就任には学部の賛同が得られぬままだったという。1934-1941ローゼンベルク機関学識者長、1934ナチ党大学委員会哲学精神科学報告官をつとめるなど、ナチス学術政策で重きをなすが²¹、それらは「ナチス哲学」、「ナチス教育学」称揚という政治的理由に依るところが大きかったと推察される。

19 A. a. O., S. 147.

20 Grüttner, S. 99.

21 A. a. O., S. 18; https://de.wikipedia.org/wiki/Alfred_Baeumler 最終閲覧：2019/11/06

これらの寸描によるかぎり、ナチス教員連盟メンバーの多くがノンアカデミカー、非教養層の出で、第一次大戦後の戦後混乱のなか、ナチ党・ナチス教員連盟に加わって指導者となり、ナチ党・ナチス運動の中に自己投企したと言ってよいであろう。いずれにせよ、ナチス教員連盟とナチ党（そして国家）とは「一体的関係」だったのである。

ナチ党が「連盟」を指導する機構が、1934年に創設された「教育者主庁」(Hauptamt für Erzieher)である。それは「連盟」の組織に対応して以下のように編成されていた²²。

表5. ナチ党のナチス教員連盟指導機構「教育者主庁」(Hauptamt für Erzieher)

Hauptamt für Erzieher 教育者主庁:1934創設。党機関としてナチス教連を政治指導, 信任, 監督。(Feiten, S. 140)

局 Abteilung 構成 (1934.10) (Feiten, S. 141.)

Nr.	
n.01	Geschäftsführung 事務局
n.02	Organisation 組織局
n.03	Schulung 研修
n.04	Erziehung und Unterricht mit Unterabteilungen 教育および教授局, 下位局あり
n.05	Kasse 財務局
n.06	Wirtschaft und Recht 経済・法務局
n.07	Presse und Propaganda mit 2 Unterabteilungen 新聞・プロパガンダ局, 2下位局あり

教育者主庁とナチス教員連盟指導者の管轄レベル (Feiten, S. 143.)

Nr.	管轄レベル
n.01	Reichswaltung (ライヒ=全ドイツ統括)
n.02	Gauwaltung (ガウ統括)
n.03	Kreiswaltung (郡統括)
n.04	Kreisabschnitt (bei Bedarf) (郡内地区統括。必要に応じて)

教育者主庁 Hauptamt für Erzieher の部門構成 (1934. 5. 11.) (Feiten, S. 144)

Nr.	
n.01	a) für allgemeine Angelegenheiten (総務部門)
n.02	b) für Volks- und Mittelschulen (国民学校・中間学校部門)
n.03	c) für die höheren Schulen (中等学校部門)
n.04	d) für das berufliche, gewerbliche, kaufmännische, landwirtschaftliche und bergmännische Ausbildungswesen (職業・産業・商業・農業・鉱山教育問題部門)
n.05	e) für das bäuerliche Ausbildungswesen (農業教育問題部門)
Nr.	特別領域
n.01	a) Landjahr, auf das der NSLB auch in verstärktem Maße Einfluß nehmen sollte (農業年関連——連盟も強度の影響をもつ場合)
n.02	b) soziales Erziehungswesen (社会教育関連)

22 Vgl. Feiten, S. 141-144.

ナチ党とナチス教員連盟との「一体的関係」を、いま学校田園寮の例で見たい。これに関してケーニヒは次のような構図を描いている（主要部分）²³。

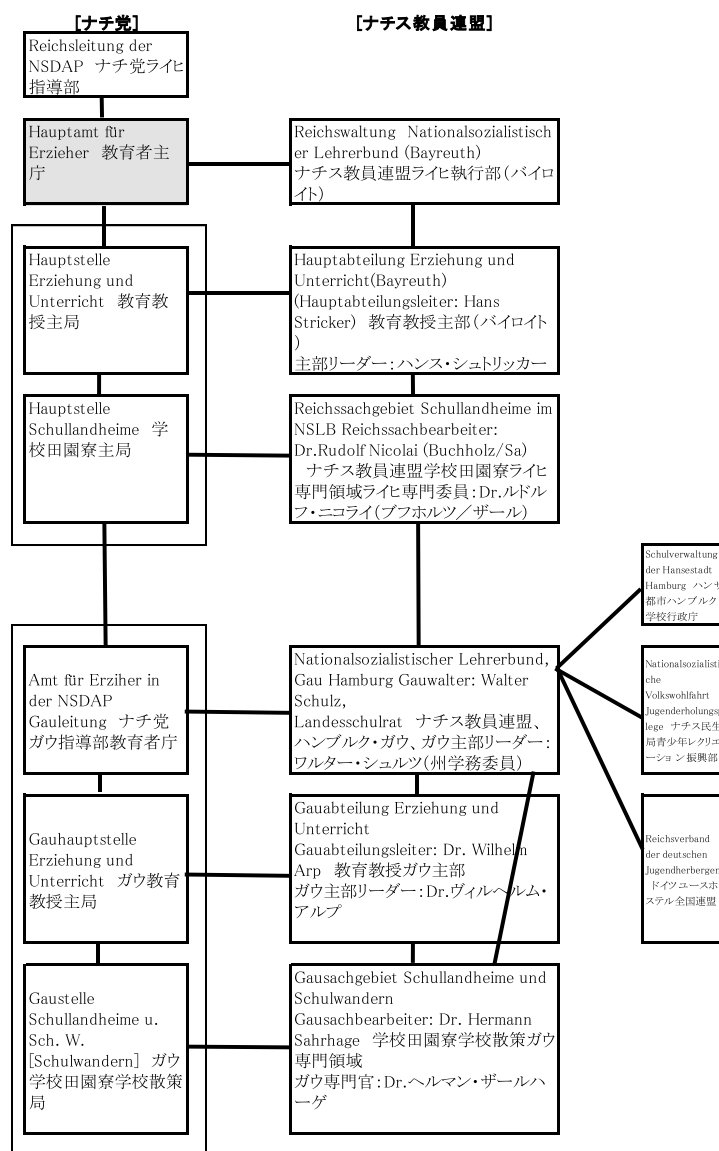


図1. ナチ党とナチス教員連盟（学校田園寮関連，部分）

23 Organisationsstruktur des Gausachgebietes Schullandheim und Schülerwandern im NSLB, Gau Hamburg (Stand 1934), Grafische Darstellung entworfen nach der Übersicht 'Nationalsozialistischer Lehrerbund, Gaustelle für Schullandheime und Schülerwandern, in: AVSLHKasten V.I./ NSLB, Akte Nationalsozialistischer Lehrerbund, Gau Hamburg (Entwurf des Verf. =ケーニヒスによる) Karlheinz König: Schullanheimbewegung, 2002, S. 85.

https://ns-in-ka.de/wp-content/uploads/2017/04/geschichte_1933-45_landschulheime.pdf 最終閲覧：2019/11/06.

このようにナチ党とナチス教員連盟とは不即不離の関係であった。それは機構としては指導・被指導の関係であるが、人的には「一人二役」(Personalunion)体制であった。その結果、ナチス教連の各種組織・活動展開においては、機関・関係者の意見集約・合議よりも、党ないしヒトラーの承認、信任によって一挙に制度化するという体制が作られる。近代的システムとは相容れない党・ヒトラー直轄体制は、一方でナチス教育制度の早期構築を可能とさせたが、他方において、組織間の対立・抗争、個人的確執、首尾一貫性を欠いた場当たりの施策も出現させたのだった²⁴。

3. ラガー教育と「ナチス教員連盟」

クールヘッセン・ガウにおけるラガー日課 (1935年7月17日)	
6:00	起床, 早朝スポーツ, 洗顔, 部屋整理整頓
7:15	部屋点呼
7:30	旗パレード
7:45	朝食
8:15-8:45	講演「民族共同体生成とナチス国家におけるこれの意義」(党員, エルンデ)
9:00-10:30	講演「ナチス教育と教員」(党員・視学官 Dr. ブランク)
10:30-12:00	体操とゲレンデスポーツ
12:00	昼食
12:30-14:00	自由時間
14:00-15:30	講演。ヒトラー・ユーゲントとドイツ女子同盟
15:30	コーヒータイム
16:00-17:30	射撃
17:30	講演「帝国思想を巡る戦い」(党員 フォン・レテル)
18:50	旗パレード
19:00	夕食
19:45	命令発布
20:00-22:30	自由時間

表6. 教員用「ラガー教育」の実際 (1935年)²⁵

次にこのナチス教員連盟の「事績」を問題にしてみよう。私は、連盟が歴史の中で果たした負の役割を見逃すことはできないが、翻って、ナチス教育の「新しさ」に注目することもまた重要だと考える。当時国民は(「小市民」は)、なぜにこの「新しい」改革を受け入れたのか。それは、「はじめに」で触れた、教育における「学校」中心主義、そこにおける「知育」偏重、外国文化の一面的跪拝など、この国の教育を長く覆っていた〈教養主義〉の問題に関わる。それに対してヒトラーは明瞭な対案を提起した。曰く、社会における教育、身体の強化、体育重視、男女別学、

24 当のヒトラーも、戦争指揮において科学的判断と見通しを欠いていた。大木 毅『独ソ戦：絶滅戦争の惨禍』岩波新書、2019、参照。

25 Feiten, S. 309, Anm. 95.

ドイツ文化カリキュラム、生きて働く教養、そして、果敢な行動力を備えた人格の錬成、である。それまで国民（「小市民」）は、教養層と非教養層に分断された社会と教育を、やむなく受け入れてきた。しかし今、戦争と敗戦でこの社会の価値体系、教育体系が崩壊した。人々は教養主義の教育に代わる「新しい教育」を渴望していたのである。「新しい教育」は、人々に近い「論理」からなる教育だった²⁶。

（1）中等学校生徒の「民族政治科実習」（Nationalpolitische Lehrgänge: NPL）

この留保を付した上で注目されるのが「ラガー教育」である。前著において私は、中等学校における「民族政治科実習」（Nationalpolitische Lehrgänge: NPL）を取り上げ、これが身体・心情・ナチズム志操形成を核とする擬似軍隊的な錬成の教育、「キャンプと隊列（„Lager und Kolonne“）の教育」の典型だとした²⁷。「民族政治科実習」は、都市の文化環境下の「学校」という教師支配、〈教養主義〉の空間を脱して、田舎の学校田園寮（特に他民族の脅威に晒されている国境地の学校田園寮が推奨された）で、寝食を共にして行われる「実地学習」である。ここでは、複数のギムナジウムの上級生徒が、教師支配の学級を解体し、ヒトラー・ユーゲントのリーダーシップのもと、新たな「生活協同体」（Lebensgemeinschaft）を形成し、2週間に亘ってスポーツ、土地探索、余暇造形、そしてわずかの文化学習（それも講演中心）を展開するとされた。この空間は、若者にとり「生活協同体」であるとともに、小「民族共同体」（Volksgemeinschaft）と見做される。彼らは、この「愛着ある空間」での実習を通して、自分がドイツという大「民族共同体」の不可分の構成要素であることを体得する。そこにおいて彼らは僚友を「君（Du）」と呼び合い、互いに同志、「学校生徒」を脱した「祖国の若者」たろうとしたのである²⁸。

1937年、アンハルト州首相、フライベルク（Bruno Erich Alfred Freyberg, 1892-1945）は、この鍛錬教育を行う場としての学校田園寮（Schullandheim）の普及推進をライヒ並びにプロイセ

26 ヒトラーは、近代教育の問題点を批判しながら、教育の目的に〈ナチス教育〉の「正当性」を巧みに滑り込ませたとと言える。曰く「実際に学問的教養はさしてないが、肉体的には健康で、善良で堅固な性格をもち、欣然とした決断と意志力に満ちた人間は、才知にめぐまれた虚弱者よりも、民族共同体にとってはより価値がある」と（ヒトラー、同上、p. 61）。その帰結が、軍隊を「祖國的教育の最後、最高の学校」とする兵営国家の教育である。この呼びかけは、敗戦と失業、天文学的インフレーションに苦しむ「小市民」の不満に合致した（彼らは、中等教育や大学で行われる〈教養主義〉の教育とは無縁の庶民大衆だった）。

27 小峰、前掲書、第3章 民族政治科実習；第6章 ナチス教育学；および補論 ラガー（Lager）—ナチス「キャンプと隊列の教育」—、参照。

28 Vgl. Kraas, Andreas: „Den deutschen Menschen in seinen inneren Lebensbezirken ergreifen — Das Lager als Erziehungsform, 2011.“ In: Klaus-Peter Horn/Jörg-W. Link (Hrsg.): Erziehungsverhältnisse im Nationalsozialismus. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2011; 小峰「ラガー（Lager）——ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開——」『中京大学国際教養学部論叢』第10巻第1号 pp. 1-21. 2017/10, 参照。

ン教育大臣ベルンハルト・ルストにうたえている（「覚書」, 1936. 1. 6）²⁹。その中でフライベルクは、学校田園寮の教育はヒトラーの教育目的に合致すると謳った（大要）。

ライヒ並びにプロイセン教育大臣宛, アンハルト州首相, フライベルク覚書 (1936. 1. 6)

これまでの革命は精神が弱く、衰退した。

これに対し、ヒトラーは教育を重視する。100年の持続をする新しい教育の確立、それには若者の教育が重要。協同体が必要。家庭、学校、ヒトラー・ユーゲント、そして軍である。

ヒトラー、人格と意志の訓練重要。学校は価値なし。誠実、犠牲精神、口の固さが必要である。これの育成は、ガラクタ学校ではできない。それが半端の平和主義者を育ててきた。完全なるドイツ人の育成を→民族共同体へ。学習学校にあらず。

1. 学校田園寮

民族協同体基礎の協同体体験をさせるところ。まずクラス→教師は「指導者」となる。生徒に自発促す→真に慕われる存在へ。協同体となり、相互信頼と人格の尊敬、同僚性ができたとき→真の指導者となる。…

4. 学校——肉体鍛錬。

5. ナチズムの教育——誇りを育てる。

6. 第三帝国＝農民国家。総統曰く、自覚が大事。農民の如く考え生活する→学校はこれに寄与する。学校田園寮で——健康、精神、人格、性格を治療する。読書・散歩の中ではなく、自己の観察と体験による。→大地との結合。自分の畑、庭を。自分の動植物。農民のするがごとくに。これを将来強化せよ。自ら紡ぎ、自ら収穫する→再び土へ。田園寮はこれら困難な課題に立ち向かう。アンハルトでは、それに取り組み済みである。…

覚書を目にしてヒトラーは大いに喜び、「ドイツ学校田園寮はナチス教育システムの一部である」と、今後学校田園寮へのあらゆる支援を約束したのである。

この、さながら戦前日本軍隊の「内務班」³⁰を想起させる「ラガー教育」は、ナチス教育・ナチス教育学の象徴的形式となった³¹。

29 アンハルト州首相, フライベルク (Bruno Erich Alfred Freyberg, 1892-1945) の「ライヒ並びにプロイセン教育大臣ベルンハルト・ルスト宛覚書」(1936. 1. 6) は1936年末に提出。1937年初めには、ヒトラーがこれに賛同して「学校田園寮に「あらゆる支援」を約束した。ナチス教員連盟は、[これに]「反対する者は総統(ヒトラー) 見解への反対である…」(帝国新聞『ドイツの教育者』1937. 4) として、学校田園寮とラガー教育により強く関わることになる。

König, S. 104-105. In: https://ns-in-ka.de/wp-content/uploads/2017/04/geschichte_1933-45_landschulheime.pdf 最終閲覧：2019/10/26.

30 三国一朗『戦中用語集』岩波新書, 1985; 吉田裕『日本の軍隊——兵士たちの近代史——』岩波新書, 2002; ——『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実——』中公新書, 2017, 参照。

31 実際は、学校田園寮に代わり「ユースホステル」が、生徒のための「民族政治科実習」の主たる場となって行く。そこには「民族政治科実習」を「学校」枠組の取り組み（「拡大された学校」）として行うことをめざす文相ルスト（学級を維持、担任教師の指導性を尊重）と、クラスを解体してその指導を若者自身（＝ヒトラー・ユーゲント）に委ねたいとするシーラッハとの対立があった。ルストは、若者が身体を自分自身ならびに共同体生活に耐えうる強固さにまで陶冶するという課題は、都市の学校空間を脱し大地と結合した学校田園寮での民族政治科実習で行うことが望ましいとした。これに対し、ヒトラーの

しかしこの生徒のための「民族政治科実習」は、1936年12月、試行3年で突然停止された。それは、ナチス教員連盟が、「民族政治科実習」はイデオロギー教育の場として「世界観教育」を貫きえないと判断したことに依る。「民族政治科実習」は、ルスト帝国教育相の〈学校〉緊縛論理を打ち破ることができなかつたのである³²。

しかし、これによって学校の「ラガー化」が押し留められたのではなかつた。逆に、「ラガー化」が社会全体の構成原理として拡大強化されたのである。

(2) 「教員ラガー」とナチス教員連盟

生徒用「民族政治科実習」に対応するのが、教員再教育としての「教員ラガー」(Lehrerlager)である。これはのちに、教師用「民族政治科錬成実習」(Nationalpolitische Schulungslehrgänge)としてナチス教員連盟が専管するものとなった。

そもそもナチス帝国においては、学校だけでなく、社会全体にこの「ラガー」が張り巡らされた。子どもから青年、大人、労働者、女性、芸術家、スポーツ関係者、そしてナチ党関係者そのものをも対象とするラガーなど、ラガー(Lager)は年代別、性別、地域別、階層・職種別、指導階層別にあまねく組織されて、国民全体の組織化、総動員態勢化がはかられたのだった。近年このラガー(Lager)を研究したクラスは、生徒用「民族政治科実習」や「教員再教育」(Umschulung der Lehrerschaft)ラガー、ユーターボークにおける法学者協同ラガー、アルト・レーゼ(Alt Rehse)のドイツ医師団指導者学校教育ラガー、大学私講師ラガー、さらにはナチ党ラガー、ナチ党諸機関・党連携諸機関のラガーにまで及ぶ100種類以上のラガーを挙げている³³。これはまさに池内紀が謂う「日常の隅々まで監視の目を光らせている…、隣人が互いを見張って[いる]]社会である³⁴。このラガーについて、私は前著で次のように述べた³⁵。

直接の後ろ盾を得たライヒ青少年指導者シーラハは「学校」ではなく「軍隊」を求めた。

すでにシーラハは、1933年の「ケーゼン協定」(das Köseener Abkommen, 1933. 3. 12)で、「ドイツ・ユースホステル連盟」と「ナチ党青少年指導部」との協力を謳い、全国のユースホステルを「丸ごと」ヒトラー・ユーゲントに下屬させていた。これの上に、文相ルストとの間で1934協定(「ルスト・シーラハ協定」(1934.7.30)を結んで、「ユースホステル連盟を「ナチ組織」と見做すものとする」としていた。学校田園寮は元々都市のエリートギムナジウム生の田園実地学習の場として発展してきたものであり、数も多くはない。そのような学校田園寮での、教師に支配されたルスト型「キャンプと隊列の教育」ではなく、より簡素で民衆的な「ユースホステル」で、年長リーダー「ヒトラー・ユーゲント」により展開される疑似軍隊訓練中心の民族政治科実習こそが、真の「キャンプと隊列の教育」=「民族共同体教育」だとしたわけである[ユースホステルの優位性]。Vgl. 小峰『ナチスの教育』第3章 民族政治科実習、参照。

32 Vgl. Eilers, S. 41; 小峰『ナチスの教育』第3章 民族政治科実習、参照。

33 Vgl. Kraas, S. 314-317.

34 池内、前掲書、p.253(注13)。

35 小峰、前掲書、補論 ラガー(Lager) —ナチス「キャンプと隊列の教育」—、参照。

青少年対象のものにとどまらず、①大学教員を含む教員ラガー、②国家エリートの医者・医療関係者、司法関係者対象のラガー、③文化・スポーツ・芸術・国際交流関係者対象のラガー、そして④ナチ党関係者自体を対象とするラガー、と世代別、領域別に、そしてこれらが層的に多様に配備されていた（そこには「退職教員」教育ラガー、「戦傷教員・身体障害教員」教育ラガーなども編成され、すでに〈社会〉の第一線を退いた人々、あるいは社会福祉の対象者である人々も「漏れなく」組織されていた）。

中でも、若い世代の教育をになう教員は、社会のナチ化に重大な役割を負っている。そのためナチスは、1933年の権力掌握とともに、教員の世界観教育を特別に重視した。だが、この教員の世界観教育は、当初は国家教育行政機関、中でも中央教育研究所(Das Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht)が担ったのだった(所長ベンツェ³⁶)。

それがヒトラーの「ドイツ民族のナチ的・政治的錬成(die nationalsozialistisch-politische Schulung des deutschen Volkes)」方針をうけ、1936年5月、教員の世界観教育をナチス教員連盟が専管することになる。以下、ファイテンの研究を中心としながら教員ラガーについて見てみることにしよう[まとめ、見出しは小峰]³⁷。

①「ナチス革命」当初

ナチ党権力 = 権力掌握未完。国家・民族と未来へ総動員。

ナチズム精神下の総動員体制。学校→全生活へ。

ドイツ人の教育努力→学校、ヒトラー・ユーゲント、労働奉仕、軍、党(ナチ党)→ナチズム思想覚醒。党、黨員、団体→練達の人員。ワイマール時代の刻印を再教育する。ナチス教員連盟の使命。

第三帝国に有能教員をささげる。

当局：①プロイセン文部省 ②ライヒ教育省 ③中央教育研究所 ④ドイツ政治大学(Deutsche Hochschule für Politik:1920ベッカーら設立。戦後FUに統合) ⑤国立総統・政治学校 Staatsschule für Führertum und Politik:ヴェヒトラー設立、チューリンゲンにて)

・ナチス政権直後の方策——プロイセン文部省令、人種学等指示(教師用)

・ライヒ教育省の案——「国民学校教員の世界観再教育：1. 中央教育研修機関の設立 2. 全

36 ベンツェ(Rudolf Benze, 1888-1966)——ドイツの教育者、ナチス帝国教育省、SS幹部。ブラウンシュヴァイク生。カントールの家。第一次世界大戦参加。Realgymnasium教師。校長。1932 ナチ党入党。1931 ナチス教員連盟加盟し中等学校部門長。1933. 7. プロイセン文部省報告官。ルスト下に中等学校局長。人種学に基づくラディカル改革。生物=中心教科、外国諸語=英語特化。・教科書担当、HJ連隊指導者・1938中央教育研究所長。教員継続教育人種学原理で。NAPOLA指揮。イスタンブールのドイツ人学校弁務官。・戦後1947英軍逮捕。釈放後郷土史家。ペスタロッツ協会所属、ガウス協会創設者の一人。https://de.wikipedia.org/wiki/Rudolf_Benze 最終閲覧：2019/12/08。

37 Vgl. Feiten: a. a. O.; Kraas: a. a. O.; ——; Lehrerlager 1932-1945: politische Funktion und pädagogische Gestaltung. Bad Heilbrunn: J. Klinkhardt, 2004.

教員に年1回研修ラガー（Schulungslager）を実施する」→不成功。・理由：1. コスト 2. 単級学校ゆえ授業休講できず

他省庁案——ナチス教員連盟（NSLB），教育活動における全権代表としてこれに強く反対。

平行して実施：

- i) 中央教育研究所（Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht）講習——1933, 1934に連続講習，研修ラガー実施（Schwarzenden〈ラインラント・プファルツ〉，Bischofswerden, Neustadt〈ヘッセン〉，ルートヴィヒシュタイン〈プファルツ〉にて）。全校種教員へ。カリキュラム——人種学，遺伝学，古代史，地政学。
- ii) ドイツ政治大学（Deutsche Hochschule für Politik）——レペルマン，ベンツェ（Rudolf Benze）らの講演など。
- iii) 国立総統・政治学校（Staatsschule für Führertum und Politik）——1933-1938まで。チューリンゲン。〈同校はワイマール期設立の作業ラガー（石破碎，道路建設）を，ヴェヒトラー提案でチューリンゲン内閣が失職教師教練ラガーに再編したもの〉。14日間研修（教練）。1935末までに263コース。17,207名参加。公務員も。ヴェヒトラーのナチス教員連盟議長就任でこの政治学校は終わる。ナチス教員連盟，教員教練は管轄外となる。

参加者内訳：

表7. チューリンゲンの国立総統・政治学校参加者数（1935末まで）

1935末まで	校種	数	全参加者数
	国民学校教員	5,476	
	中間・中等学校	1,902	
	職業・技術校	7,378	
	全校種教員合計		14,756
	[その他]	2,451	
	合計		17,207

② 「オーバーホール」——教員の世界観教育

教員の世界観教育。省令規定では達成できず。教員の思考，実践を改変させること。特に歴史の教師は重要。

過去：知性教育，自由主義。

1933年から——民族性の覚醒。ドイツ的教師〈Deutsche Lehrer〉をまず養成³⁸。

新しいかつ最重要の教育形態が教練から導かれるとき、その80パーセントは、世界観的な諸原理、例えば、人種学、共同体理想、そして指導者原理に基づいていた。

教育とプロバガンダとの区別はなかった。ライ博士 (Dr. Ley) ナチ党機関教育局長——区別の困難性を指摘する。まず世界観、次いで知識。

ラグー教育

- ・複合体 = 講義、寮〈ハイム〉の夕べ、ファイヤー、大会、会議。——授業 + 儀式。心情的形式である。
 - ・教化人物によるラグー教育——「シュプレヒコール、旗パレード、歌、スポーツ活動、山野散策、ユニフォーム、食事。これを体験した者、より深く体験しうる者こそヒトラー・ユーゲントを理解できる、このような者だけがナチズム教育目標に向け教練できるのだ」。疑似制服や地域別ガウンあり。国防スポーツも。
 - ・世界観講義——最大。週末のラグー催し。ラグーは8週間に及ぶ。
 - ・1935年初めまで——教師の自発意志、手加減も可能。
- 1935年から——自発言動は不可。身体障害者以外は参加強制。年齢の配慮なし。
- 1933.11.16 プロイセン文部官レベルマン、通達でラグー教育示す。「教員に同志性求める閉じたラグー」(メルゲントラー=ヴェルテンベルク文部大臣)。同様の傾向はバーデン・ガウにおいても、ハンブルク、その他に於ても見られた。
- ・権限不明瞭——バイロイト中央への服属不十分、ナチ党認可のない形態へ。・ハンブルク、疑

38 ドイツ的教師〈Deutsche Lehrer〉——ナチスが「教育」を語る際、学校・教育場面でそれまで一般的に使用されていた「教育」用語 Bildung (陶冶・教養、教育) や Unterricht (文化の系統的教授、授業) に代わって Erziehung (引き出す・育てる、しつけ、教育) が多用されている。ナチスの語る〈Erziehung〉とは、西洋近代の教養主義を否定し、身体教育の基礎の上に果敢な実行力を備えた人格錬成をめざすという、ヒトラーの謂う意味での〈教育〉を指す(バイロイトの連盟本部がドイツ教育会館 (Haus der deutschen Erziehung) と命名されたのは先に見た通りである)。この西洋近代を「克服」する〈教育〉こそが、真に deutsch (「ドイツの」, 「ドイツ的」) 〈教育〉と言いうる。ドイツ的教師〈Deutsche Lehrer〉とは従って、この「ナチス教育」に邁進する教師のことを意味するのである。

それは、かつて戦前日本で、西洋近代とは一線を画した「日本教育学」(近藤 寿治) なる「独自の」教育学説が唱導されたことを想起させる。

「……戦時下、1935年刊行、版を重ねた近藤寿治の『日本教育学』(宝文館) もその[天皇中心の国家即社会論] 典型のひとつである。「明日の教育学は主観的なものから客観的なものへ、抽象より具体へ、個人的世界的なものから国民的なものへ」「人間存在の根元としての国民の学」に基礎づけを有たねばならなくなった。」「我々日本人は孤立せる個人」の存在でもなく日本国を超越した世界的生存でもない。天祖の教を神ながら履み行う所の億兆一心の具体的実践的な存在であり、建国の精神が、天皇の勅として今に実現せられつつある君民一体の存在である」というごとくである。君臣一体の「国体」にたつ「国家」「国民」の教育学が数多く刊行された。」海老原 治善『戦後日本教育理論小史』国土社、1988, p. 34, 参照。

似軍隊関連。特にゲレンデスポーツ。



- ・「ナチス精神の発動」——単一様式ラガー。
- ・教員平等——階層無視。 ・科目・校種——専門活動。 ・科目以外——地域教員団結，部門編成。 ・ガウ教練監督。

ナチス教員連盟・党連携→教員の世界観教育

- ・宣伝指導命令 →ナチス教員連盟にも。演説者=レベル 1, 2, 3に分けられる
- レベル1——帝国専門弁士 (Reichsfachredner) 1933. 1. 1以来。並外れたレトリック能力を備える。政治的演説。ナチスと所属ナチス運動に関与する。
- レベル2——専門弁士 (Fachredner)。ガウ演説者など。
- レベル3——郡弁士など。郡の長，軍の報告官，党員，そして党員でない者も要請される。「演説者学校」(Rednerschule)への参加なくとも。党の継続教育雑誌『意志と道』(Wille und Weg)を材料にして。
- ・全弁士——ナチス教員連盟 (NSLB) 弁士団に所属。その組織編成 (ライヒ・ガウ・郡弁士団) はナチ党組織に対応し，党のプロパガンダ指導者の監督下に服する。中でも「NSLB 帝国弁士団」(バイロイト) (NSLB Rednerring) ——国会選挙に，ナチズムテーマの連続集会を企画開催。

●「教員団のオーバーホール (再組み立て) を」(Überholung der Lehrerschaft) —— (1934. 6. 8) ルスト，ミュンヘン「クローンサーカス」(Zirkus Krone) 教員集会で発言。

- ・これよりはるか以前—ナチス教連 (NSLB)，教練ラガーでの教員団の世界観再教育を開始



- ・受け止め——「教員団のオーバーホール」:「ラガーによって，隊列によってのみ人はナチストとなる」(Nationalsozialist wird man nur im Lager, in der Kolonne, ルスト)とされたが
- ・「時期尚早」(ワイマール共和国と時間的に近かったため)，
- ・教員内党員も「有害」(→ナチズム・ラガー実践不要とする)，の受け止め。



③教員ラガー実現

- ・ヴェストファーレン南ガウ——教員ラガー245名，14日間。全校種教員参加。
- ・賜暇に困難も。ヴェストファーレンほどには行かず。(例)南バイエルン——休暇の取り消しあり→ルスト，「休暇中の講習を原則とする」。

他例。→ナチストの目から，「世界観教育，統一性が問題」。→帝国教育省「休暇問題については更なる措置，態勢が必要」



- 教育者主局 (Hauptstelle „Erzieher“) ——1935. 2. 5 シェムとミュンヘン主幹研修局長, Dr. フラウエンドルファー (Dr. Frauendorfer) 協定結ぶ。

党→ナチス教員連盟。同種の各級指導者 (ガウ, 郡指導者), 人的連絡。

- ・このときパイロイト——1935年春, 機構再編, 教育局は独自局となる。
- ・費用問題——1935まで国, 党 →ナチス教員連盟へ金銭支出なし。
- ・連盟財政——ガウ内部の 旧教員連盟に財政依存。→財政, 会員数多様→教練ラガー実施と拡大に迅速対応や連携に不十分。
→ガウ拡大。→教練ラガー実施できないところも。1935年まで——費用自弁。1.5-2.5ライヒスマルク。

●参加者数

1933-34——メニュー少数, 参加者, 少数 (トップ内: 異論あり)

苦戦: デュッセルドルフ 熱心なガウ: チューリンゲン, 東プロイセン, シュレジエン

・低いガウ: ケルン・アーヘン

1936: 総数 11,129 (うち9,949がナチス教員連盟員)

表 8. 教員ラガー参加者数 (ライヒ, 1934-1937)

全国参加者	年	数	摘要
	1934	23,882	10%
	1935	35,057	
	1936	44,284	
	1937	45,000	概数

- NSLB 教練所——エルケレンツ Erkelenz 近郊リンニヒ Linnich (ライン左岸)

1933-34——55名

1936 —— 0名

1937 ——150名 (高い数)

- 帝国レベル——1937年まで——148,732名 (半数はナチス教員連盟教員)。1938年——35,813名。
1939年 (大戦開始年) ——215,000名

④確執終了 [シェム死後]

- ナチス教員連盟 vs. 帝国教育省——(1936. 5. ルスト省令) ナチス教員連盟が全教員のナチズム教育権限もつ→加えて今まで党にあった権限も NSLB に保障。

・ヴェヒトラーとルストとの協定——従来国の監督当局設置の「政治科練成実習」(politische

Schulungslehrgänge) も NSLB ガウ指導部に移譲。



- 《重要》 ①講習直ちに年間化 ②代替要員が得られるなら教員賜暇承認。

これは幼稚園教員、託児所教員、青年館教員も含む。いずれも自己負担なし³⁹。

この1936年5月のルスト省令とは次のものである⁴⁰。

[(ルスト省令) 世界観教育, ナチス教員連盟へ委譲 (1936. 5. 12)]

帝国ならびにプロイセン州教育大臣

省令 E III b Nr. 1200 II.1, E II, M

ベルリン西南, 1936年5月12日

[ナチ] 党総統・ドイツ宰相 [ヒトラー] がドイツ民族のナチ的・政治的錬成を命じたことに鑑みると、各職業層がこの政治的課題を、自身の固有の使命に即して実現できるか否かは党に責任を持たされた諸機関ならびに諸団体の双肩に掛かっている。したがって、全教員層のナチ的・政治的錬成についてはこれをナチス教員連盟に委ねるものとする。

本官はナチス教員連盟主庁代表・ガウ長官ヴェヒトラーと次のように協定した: 教師用「民族政治科錬成実習」(Nationalpolitische Schulungslehrgänge) はこれまで国の学校監督当局により実施されてきたものであるが、今後それに代わって [ナチ党の] ガウ庁指導部 Gauamtsleitungen [Amt für Erzieher in der NSDAP Gauleitung ナチ党ガウ指導部教育者庁のこことか——小峰] によってこれを実施するものとする。

講習が全教員に首尾良く実現できるよう、本講習は年間を通して配置することが欠かせない。そのため本官は、全国の学校監督当局に、授業に必要な代行が調達できるならば賜暇の必要な教員にはこれを保障するよう命じる。但し、[卒業] 試験ならびに進級 [試験] で学校・教員に大きな負担のかかる復活祭の時期には、最大限、講習を実施しないよう努めるべきである。

各州長官・行政区長官、首都ベルリン州委員、ザールブリュッケン国家弁務官配下各学校局ならびにこれに対応する各邦教育行政当局においては担当者を決定し、当該ナチス教員連盟ガウ主庁と共に [mit den betreffenden Gauamtsleitungen des NSLB: ナチス教員連盟のガウ統括部 (Gauverwaltung) のことか——小峰], 教練にあたり国の側で議論すべきすべての必要不可欠事項を協議し、かつ、当局における教練関連事項(賜暇その他)を漏れなく検討するものとする。

本官が重視するのは、これら当局が、ナチス教員連盟によって [これまで] 切り開かれた教練を [今後] 全力を挙げてその促進に当たられることである。

39 Vgl. Feiten, S. 177-182.

40 Kraas (2004), S. 167. ファイテンは本省令の評価を二次資料から導いたのみであった。それに対し、クラースは本省令原典を掘り起こし、著書(ポツダム大学博士論文)に写真で紹介している。

[他方], 目下進行中の授業活動ならびに教育改革に絶対必要な [教師の] 専門的訓練は [これまで通り] 学校監督当局により実施されるものとする。

1934年5月31日省令 (UIIB1300) ならびにこれに付随する諸省令は失効するものとする。

署名 ルスト (Rust)

各州長官・配下学校局 殿
各行政区長官 殿
首都ベルリン州委員 殿
各邦教育行政当局 殿
再組込州ザールラント帝国弁務官 殿

認証済
教育相秘書ローゼンバーン (Rosenbahn)

- ・賜暇に反対の校長——「= 第三帝国敵対者」。休暇を否定できず。
- ・1937年～ ——教員不足。特に国民学校教員。賜暇不承認は無意味となる = 理由：軍役、政治行動でもはや代替不可能
- ・講習の抵抗——党団体による校外活動、ナチス活動の効果面に異論（国家青年日導入1934. 6のときと同様）→ 講習 8 - 14日に制限。

●教練ラガー (Schulungslager) 発展

- ・ラガー広域化 → ガウ学校 (Gauschule) 創設するガウあり——ガウ学校：各ガウ内に設置、ガウレベルで教練方策を補完。1938. 10. 1時点で23ガウに29のガウ学校存在。
- ・教練ラガー寮 (ガウ学校含む, 1938. 10. 1)
57寮——ナチス教員連盟。うち 8寮 = 独自寮。19寮 = 賃貸。30寮 = 賃借。

●教練ラガー寮 (ガウ学校含む, 1938. 10. 1)

教練ラガー	
独自寮	8
賃貸	19
賃借	30
合計	57

●教練支出 (1938) Feiten, S. 182. (S. 313 注154)

表9. 教練ラガー費用支出

項目	金額 (RM)
交流ラガー (Austauschlager)	332,967

祖国ラガー (Deutschlandlager)	11,295
若手教員行進 (Jungerziehermarsch)	106,407
帝国ラガー (Reichslager)	40,599
帝国学校ドンドルフ (Reichsschule Donndorf)	3,875
夏期ラガー (Sommerlager)	169,323
ガウ学校資産 (Inventar der Gauschulen)	3,197
装備 (Ausrüstung)	11,518
[計]	679,181

・ 1937年までに——600万ライヒスマルク。

・ 大戦開始までに——4,000ラガー実施。

費用800万ライヒスマルク。

うち600万ライヒスマルク——連盟負担

200万ライヒスマルク——費用自弁

不満があれば連盟が負担する。

●非党員教員への「教練」(Schulung) 重視 ⇒ ナチ党員化はかる

・ ナチ党員でない教員 [30万名ナチス教員連盟中]

7/8の教員 [26.25万名] ——非党員 [党員教員3.75万名]

・ 3万名——ナチ党員でなく、ナチス教員連盟でもない。

・ 1936ヴェヒトラー指示——世界観分裂の克服

ナチス教員連盟所属強制，連盟への信仰告白＝ナチ党への忠誠宣言

ナチス教員連盟員——宗派団体所属禁止。教員の世界観分裂無きように。

・ ヴェヒトラー——「福音派団体脱退宣言」(1936. 11. 25)

●全校種教員の精神的・政治的均一化 (Uniformierung)

[ナチ党の]「教育者主庁 (Hauptamt für Erzieher)」により，ガウ毎に次の三層の教練で実施された。A教練 (A-Schulung)，B教練 (B-Schulung)，C教練 (C-Schulung)。

A教練——[ナチ党] 帝国指導部によるA教練と階層化した広範教練 (「夏期教練ないし休暇教練」とも称される) は，全教員をナチス運動へ召集するのが目的。14日間。

これはB教練への関門である。

カリキュラム——ヒトラー『わが闘争』，ナチ党史，綱領。

これらは，党の教育者主庁がナチス教連向けに行う独立コース教練であるが，他コース教練の課程にも相当する (例：党ガウ・郡学校コース，郡レベルのナチ婦人団 NS-Faruenchaft コース，ドイツ女子同盟 Bund Deutscher Mädel コース)。1939. 9までに郡レベルだけで約1,000講習実施。この広範教練への参加は，率，数においても

国民学校教員が全参加者中最大値を占めた。

B 教練

B 教練は A 教練の上に位置する深化・精選課程。35,000 名以上参加の B 教練は、ガウ世界観・政治作業チームの中で行われる。A 教練が、郡レベルで全教員に向け政治一般に関して行われるのに対して、B 教練は世界観の科学的深化の課程である。カリキュラム——ナチス世界観の中心をなす先史時代人種学、生物学、民族学の講義が中心。1939 年までに 1,590 講座実施。

C 教練

C 教練は性格、能力、ナチス精神において最良と判断された者だけが参加する。これは、ドンドルフのナチス教員連盟帝国学校（Reichsschule des NSLB in Donndorf）、帝国特別実習（besondere Reichslehrgänge）ないし帝国教練コース（Reichsschulungskurse）で行われる。3,500 名の選抜教師から「トップ軍団」が構成される。彼らは教練課題においては党ないし国家に対して自由に行うことができた。カリキュラム——3 週間。ナチス教育思想に特化。ナチス世界観を外国学説、世界観と対決させ、遺伝、環境を [ナチス] 世界観教育様式の中へ整序。ここでは、議論にナチス世界観の「科学的形式」を与えることが前面に置かれていたことが見逃せない。

・ガウ作業チーム教員への 6 日間の全国深化実習——ドンドルフのナチス教員連盟帝国学校にて実施。

● ドンドルフのナチス教員連盟帝国学校（Reichsschule des NSLB in Donndorf）

・教員教練，ナチ党からナチス教員連盟へ委託——1938. 10. 27 ドンドルフ城で式典。

ドンドルフ城——1937 年秋、ナチス教員連盟はエドムント・フォン・ヴレーデ侯爵（Fürst Edmund von Wrede）のドンドルフ「幻想宮殿」（Schloss Fantasie）を取得⁴¹。既存 29 ガウ学校（それまで 148,232 名教員が教練済）の中央教育館とした。

41 ドンドルフ（Bayreuth-Donndorf）の「幻想宮殿」（Schloss Fantasie）——元ブランデンブルク・バイロイト辺境伯フリードリヒとヴィルヘルミーネ夫妻の夏の離宮。優美な城館（庭園美術館）と大公園とで一大庭園美術館をなす。1937 年秋同館をナチス教員連盟が取得、全国の研修所を束ねる中央研修所とした。開所式はナチ党全国指導者アルフレート・ローゼンベルク（美術品の略奪等を行った「全国指導者ローゼンベルク特捜隊 Einsatzstab Reichsleiter Rosenberg, ERR」）で知られる）の指揮の下、多くのナチ党幹部が出席して行われた。今は亡き同盟設立者ハンス・シェムの母親、またヒトラーが愛好した作曲家リヒャルト・ワーグナーの義娘（息子ジークフリート・ワーグナーの未亡人）ヴィニフレート・ワーグナー（Winifred Wagner）も式典に招かれた由である。Vgl. Feiten, S. 183.; https://de.wikipedia.org/wiki/Schloss_Fantaisie 最終閲覧：2019/12/15。

⑤更なる教練ラガー

- ナチスの教練ラガー——以上の一般的教練ラガー以外に、各種の教練ラガーが計画、施行された。教練ラガー：ナチスト、最良の教育が可能と確信
- ・ガウ学校以外——夏期ラガー、帝国ラガー(ドンドルフ城)、ドイツラガー、青年教師行進(1938 プレスラウ体操祭典へ)、帝国文化ラガー・交流ラガー(ともに新ラガー。1937年から)。
- ・帝国文化・交流ラガー(Reichskultur- und Austauschlager)——ヴェヒトラー関心持つ。帝国文化ラガーは、詩や音楽。さらには民族性を育成する実践的なものとして人形劇・素人劇、ジェスチャー、即興劇実習など。学校の祭典用に民族音楽、民族ダンスなど。
- ・他機関との交流ラガー——他の機関=ヒトラー・ユーゲントやナチ・グループ、「歓喜力行団 Kraft durch Freude」との交流ラガー。
交流ラガーは年1回。休暇滞在で講師不足のため。実現できぬものもあり。
- ・国境地ガウラガー(Lager der Grenzgaue)——1937年から。プロパガンダ的・歴史的側面深化のラガー。14日間。自ガウ内の交流ラガー「海洋教育」ラガー(See Erziehung, Hainbuck)はこの目的にそぐわない。
- 管轄、参加者
- ・交流ラガー管轄——[ナチ党]教育者主庁(Hauptamt für Erzieher)教練局(Abteilung Schulung)に基づき、ガウの提案による。
- ・1937第1回交流ラガー——5,000名教師参加。77コースの交流ラガー。その中にはオーストリア教員や、リトアニア若者教員10名も。
- ・1937年からの国境地ガウラガー——ラガー受講済の教員たちが国境地域で14日間行う同ラガーは1940まで拡大。しかし、やがて戦争のためこれらの重要性は失われた⁴²。

(3) 教員の継続教育とナチス教員連盟

上記教員の世界観錬成は1936. 5. 12, ルスト省令を機にナチス教員連盟の専管するところとなった。これと共に、教員の継続教育(現場教師の職能教育=研修)分野においても、連盟は大きな影響力をもつに至っている。否、現場教師の職能教育=研修も事実上の世界観錬成となった。「研修」は、教員を「ナチス教育」を担うナチス人間に向けてこれを錬成する「ラガー教育」の場だったのである。

私はこの間の研究によって、この「ラガー教育」型式こそが「ナチス教育」の本質だと考える

42 以上, Vgl. Feiten, S. 173-184.

に至り、「ナチス教育」を大よそ次のように捉えている⁴³。

「ナチス教育」——ヒトラー『わが闘争』の教育構想の具現化（家庭・学校・社会・軍の一体的教育制度）。それは、身体教育を基礎に、人種学・歴史学を軸とするナチスカリキュラムにより、「キャンプと隊列」のラガー教育を通して「国家社会主義」人格の錬成をめざすものである。

生徒の「ナチス教育」を担う教員もまた、「ナチス教育」によって錬成されなければならない——ここに、ナチス教員連盟が教員の継続教育を主導する必然性があったのである。

これをふまえ、以下にファイテンの研究から、ナチス教員連盟の教員継続教育への関与を記すことにする。

…[それまで]学校で働く教員集団に対するナチス教員連盟の関与はわずか。教員の継続教育は、帝国教育省と中央教育研究所が行っていたからである。

連盟はこの分野で影響力を探るも、1936年までは成果なし。

しかし1936年に協定が結ばれる[前記ルスト省令(1936年5月)参照]。それによれば、世界観教練はナチス教員連盟事項とし、科目の継続教育は上記2機関[帝国教育省と中央教育研究所]が担うというものだった。

しかしこれの実効性は十分でなく、ナチス教員連盟は中央教育研究所(Das Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht zu Berlin)との連携を模索した。

対して教育省は、「ラント教育大臣-当局」という[行政]ラインでの教員研修を定める。



ナチス教員連盟[ヴェヒトラー]はこれに抵抗、総統代理[ヘス]宛書簡を送る。

やがて、教員教練に関わる権限の分離が一定程度成功した。



二つの教育省令(1936. 5. 25; 1937. 7. 7)——ナチス教員連盟と学校監督当局の活動領域が定められた。

これにより、ナチス・イデオロギーに関わる人種科、遺伝学、歴史の教練は[連盟には]制限されることになる[=行政レベルの教練]。

だが、行政レベルで中・下級官僚の75パーセントがナチス教員連盟員という事実への注文は、特になし[実際上一人二役]。



43 小峰『ナチスの教育——ライン地方のあるギムナジウム——』ほか参照。

●その結果教員教練——行政レベルとナチス教員連盟との協力が実現。

①ナチス教員連盟が発展させてきた作業方式 [ラガー教育方式] で、

②ナチス世界観教育内容の教員教練 [錬成教育], が実質実現。

・他方学校実践に近い領域——長く地位闘争に明け暮れたナチス教連への反対論根強し。



これにナチス教連反論するも効果不明

●研修領域——ナチス教員連盟の関与は、中央研究所に比して小さかった。

中央教育研究所が全校種の教科研修を、

①コース ②大会 ③実地旅行, で合法的に展開。



●やがてナチス教連——著作, 講演会, 教育週間開催などで中央教育研究所との協力実現。

●ランケンハイム教員教練所 (Schulungsstätte Rankenheim)

●ルスト方策

①1935. 5: ランケンハイム教員教練所 (Schulungsstätte Rankenheim, ベルリン南方, ツェンニン湖 (Zenninsee) 畔)

②1936. 10: ケトヴィッヒ (Kettwig: ルール地方, エッセン市) の旧フィヒテ校⁴⁴



中央教育研究所に委譲

・この二つの教員教練所と153の教員ラガー

——10,970名の国内・国外教員の教練 (教育理論, ナチスカリキュラム, 授業実践カリキュラムの研修) 実施, 1939年まで。ここにおいてはナチス教員連盟の政治的教育意図を明確に限定することなく行われた。

●ナチス教員連盟が, 教員の職業的継続教育を専管することは出来なかった。



●連盟の努力——世界観の規制, 教育者の活発化をめざすことに特化⁴⁵。

44 ケトヴィッヒの旧フィヒテ校は数奇な運命を辿っている。同校は帝政時代に師範学校として始まり (1908), ワイマール時代には上構学校 Aufbauschule へ改組。ナチ時代になると, 中央教育研究所・ナチス教員連盟・教育省による教員の「オーバーホール」教練所となった (1933)。当初, ナチス教連と突撃隊による国防スポーツ中心の教練所だったが, 1934年にナポラへ再編 [ナポラ = Napola: 民族共同体教育を目的とする中等学校 (ナチス・ギムナジウム)。正式名称 Nationalpolitische Erziehungsanstalt (NPEA): 「民族政治教育舎」(小峰訳)]。1936年に中央教育研究所の教員教練所。大戦開始で一旦閉鎖, その後教員養成所 (Lehrerbildungsanstalt: LBA) となっている。Vgl. Kraas, S. 97.

45 Vgl. Feiten, S. 170-172.

ま と め

以上私はナチス教員連盟につき、主としてファイテンの研究に拠りながら、その組織構造とラガー教練その他に注目してこれの形姿を描いてみた。

ファイテンの書は本連盟についての初の体系的研究である。その概要は次のように表現されている⁴⁶。

- ・幅広い文献資料渉猟に基づいて、著者[ファイテン]は、ナチス教員連盟が弱小一分派からナチス第三帝国教員の一般的「大衆機関」へと発展するさまを考察した。
- ・中でも重点は、ナチス教員連盟がナチ党機構内部に占める組織構造ならびに法的地位、およびナチス教員連盟の1933年から1943年の活動停止までの諸活動領域についての研究である。
- ・ナチス教員連盟は、1933年ナチ党の政権掌握直後、競合して教育領域に影響力拡大を図っていた党諸機関との権力闘争の渦中に突入した。その後はヒトラー・ユーゲント、帝国教育省、そして後年はボルマン局との闘争が続いた。
- 連盟は様々な実験的試行にもかかわらず、教育政策に一大影響力を行使することはできなかった。だが連盟は、教育実践と結び付いた教育活動領域で、連盟のコンセプトと目標を意義づける多様な可能性を保持した。
- そのためナチス教員連盟は、教員たちを、かつての組合活動事業の影響力から解放し、ナチス精神で政治参加させることに成功したのである。
- しかしナチズムもナチス教員連盟も、首尾一貫した教育概念を定めることはできなかった。
- ・ナチス教員連盟の教育上の強調点は、ナチス主義者の政治的目標設定、ならびに「人種、民族、血と土」というナチズム世界観に完全に従っていた。
- ・じっさい、他の教育主管当局に対してナチス教員連盟が持っている権限が明確でなかったため、教員教化面における連盟の活動領域は、一般に制限されていたのだった。
- ・本研究は、ナチス支配体制の成立および組織構造の解明にも寄与するものである。[●・は小峰]

この評は小論をまとめてみてまことに至当なものと言える。

さてここで浮かんで来るのが、ナチス教員連盟はナチ時代の単なる跳ね上りだったのだろうかという問である。たしかに連盟は、「ナチス教育学」を確立するとか、明確なビジョンをもって教育政策にそれを実現したというわけではない。これは特に創設者ハンス・シェムが失われたことによって(1935. 3. 5飛行機事故死)、連盟のコンセプト、目標、戦略を首尾一貫したものとするのができなくなったことによる。

しかし、本文で述べたように、大学教員を含む約30万名の教員を束ね、彼らをナチス運動と「ナチス教育」に駆り立てて行ったという事実は、大きく重い。その「ナチス教育」とは、ヒトラー『わが闘争』の教育目標を体し、「キャンプと隊列」のラガー教育によって「国家社会主義」人格の錬成をめざす「新しい教育」であった。この一大目標のもと、連盟は組織の拡大強化を行って、

46 A. a. O., 裏表紙より。

一方で教員のイデオロギー教練、生活保全を行うと共に他方で学校・社会における教育に活動領域を押し広げながら、「ナチス教育」の専管をめざした。シェム後任のヴェヒトラーは、イデオロギー教育に関する連盟専管を帝国教育相ルストと協定し、連盟の宿願を実現した。(だがそれは、シェムら初期リーダーたちの活動の上に、今は亡きシェムに代わって行ったものである⁴⁷)

これを要するに、「ナチス教員連盟」は、ヒトラー『わが闘争』の唱える仮構の「ナチス教育学」に依拠し、「ナチス革命」を支える「ドイツ的人間」の教育めざし、それを支える教員錬成を現場「先鋒」として実行(試行)したのだと言える。

私の今回の研究は、ナチス教員連盟がヒトラーとナチス運動から発し、「ナチス教育」で自らを武装して「ナチス教育」を担ったということから、そのイデオロギー専管、またナチス教育の「核心」たる「ラガー教育」を中心に紹介した。ファイテンの研究は、ナチス教員連盟についての初の本格研究であるので組織研究が多くを占める。しかし、その教育活動についても、今回触れられなかった「学校田園寮」、「学童疎開」、「基幹学校」、「国境州学校」など興味深いものも多い。それらのいずれもが、今後のナチス教育研究において参照されるべきものだと考える⁴⁸。

文 献

1. Eilers, Rolf: Die nationalsozialistische Schulpolitik : eine Studie zur Funktion der Erziehung im totalitären Staat. (Staat und Politik, Bd. 4), Westdeutscher Verlag, 1963.
(Studien und Dokumentationen zur deutschen Bildungsgeschichte 19).
2. Feiten, Willi: Der Nationalsozialistische Lehrerbund. Weinheim/Basel: Beltz, 1981.
3. Grüttner, Michael: Biographisches Lexikon zur nationalsozialistischen Wissenschaftspolitik (Studien zur Wissenschafts- und Universitätsgeschichte. herausgegeben von Holger Dainat, Michael Grüttner und Frank-Rutger Hausmann, Band 6), Heidelberg: SYNCHRON, 2004.
4. Harten, Hans-Christian/ Neirich, Uwe/ Schwerendt, Matthias: Rassenhygiene als Erziehungsideologie des Dritten Reichs: Bio-bibliographisches Handbuch. Berlin: Akademie Verlag, 2006. (edition bildung und wissenschaft, Band 10).
5. Kraas, Andreas: „Den deutschen Menschen in seinen inneren Lebensbezirken ergreifen — Das Lager als Erziehungsform, 2011.“ In: Klaus-Peter Horn/Jörg-W. Link (Hrsg.): Erziehungsverhältnisse im Nationalsozialismus. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2011.
6. ———: Lehrerlager 1932–1945: politische Funktion und pädagogische Gestaltung. Bad Heilbrunn: J. Klinkhardt, 2004.
7. Scholtz, Harald: Erziehung und Unterricht unterm Hakenkreuz. (Kleine Vandenhoeck-Reihe, 1512), Göttin-

47 ヴェヒトラーについてファイテンは、チューリンゲンで行った失職教師研修ラガーとしての「国立総統・政治学校 (Staatsschule für Führertum und Politik) 1933–1938」を指摘している。だが、ヴェヒトラーはアルコール中毒と言われ、1945年4月、長年のライバル、ラックデスシェルと35人のSS隊員によって射殺されている。Feiten, S. 174; 2. https://de.wikipedia.org/wiki/Fritz_W%C3%A4chtler 最終閲覧:2019/12/08。

48 洋上学校田園寮として、「ハンス・シェム号」と命名された船舶で、ドイツ国内ならびに国境地周回の活動が活発に行われたという事実だけは指摘しておきたい。Vgl. 『学校田園寮：ナチス教員連盟教育者局ライヒ学校田園寮専門部門月報』、第9(1937)年、第5号、通巻第56(5月)号、S. 59f. (In: König, S. 119.)

gen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985.

8. アドルフ・ヒトラー, 平野 一郎 / 将積茂訳『わが闘争』下, 角川文庫, 1973.
9. 池内紀『ヒトラーの時代——ドイツ国民はなぜ独裁者に熱狂したのか——』中公新書, 2019.
10. 江頭智宏「ナチス教員連盟における新教育認識に関する研究」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第63巻, 2012/3.
11. 大木毅『独ソ戦：絶滅戦争の惨禍』岩波新書, 2019.
12. 小峰総一郎『ナチスの教育 ——ライン地方のあるギムナジウム——』学文社, 2019.
13. ———「ライン地方のあるギムナジウム(3)」『中京大学国際教養学部論叢』第8巻第1号, 2015/9.
14. ———「ライン地方のあるギムナジウム(6・完)」『中京大学国際教養学部論叢』第9巻第2号, 2017/3.
15. ———「ラガー(Lager) ——ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開——」『中京大学国際教養学部論叢』第10巻第1号, 2017/10.
16. 林量淑「総力戦教育の成立と展開——ナチズムの時代—— 第1節 教育《均制化》政策の展開過程」『教員史』(世界教育史大系30) 講談社, 1977.
17. 藤沢法映「戦争と教員 第1節 ドイツ」『ドイツ教育史2』(世界教育史大系12) 講談社, 1977.
18. ベリング, R., 望田 幸男 [ほか] 訳『歴史の中の教師たち: ドイツ教員社会史』ミネルヴァ書房, 1987.
19. 三国一朗『戦中用語集』岩波新書, 1985.
20. 吉田裕『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実——』中公新書, 2017.
21. ———『日本の軍隊——兵士たちの近代史——』岩波新書, 2002.

URL

1. Organisationsstruktur des Gausachgebietes Schullandheim und Schülerwandern im NSLB, Gau Hamburg (Stand 1934), Grafische Darstellung entworfen nach der Übersicht 'Nationalsozialistischer Lehrerbund, Gaustelle für Schullandheime und Schülerwandern, in: AVSLHKasten V.I./ NSLB, Akte Nationalsozialistischer Lehrerbund, Gau Hamburg (Entwurf des Verf.) Karlheinz König: Schullandheimbewegung. 2002, S. 85. In: https://ns-in-ka.de/wp-content/uploads/2017/04/geschichte_1933-45_landschulheime.pdf 最終閲覧: 2019/11/06
2. https://de.wikipedia.org/wiki/Alfred_Baeumler 最終閲覧: 2019/11/06
3. https://de.wikipedia.org/wiki/Hans_Schemm 最終閲覧: 2015/09/15
4. https://de.wikipedia.org/wiki/Haus_der_Deutschen_Erziehung 最終閲覧: 2019/11/08
5. https://de.wikipedia.org/wiki/Johann_Ulrich_Folkers 最終閲覧: 2019/10/23
6. https://de.wikipedia.org/wiki/Nationalsozialistischer_Deutscher_Dozentenbund 最終閲覧: 2019/10/25
7. https://de.wikipedia.org/wiki/Rudolf_Benze 最終閲覧: 2019/12/08
8. https://de.wikipedia.org/wiki/Schloss_Fantaisie 最終閲覧: 2019/12/15
9. <http://www.deutsche-biographie.de/sfz111520.html> 最終閲覧: 2015/09/15
10. Schäffer, Fritz: Nationalsozialistischer Lehrerbund (NSLB), 1929-1943. In: [https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Nationalsozialistischer_Lehrerbund_\(NSLB\),_1929-1943](https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Nationalsozialistischer_Lehrerbund_(NSLB),_1929-1943) 最終閲覧: 2019/10/15

(2019. 12. 28)